

---

# 百合のほそみち

つゆだく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

百合のほそみち

### 【Nコード】

N6251CS

### 【作者名】

つゆだく

### 【あらすじ】

そのバーはとある街のとある路地裏にある。

マスターの名前はチヨコ。今日も今日とて閑古鳥が鳴く店にただ一人の女性　ケーキが顔を見せた。

ケーキは一人陣取って今宵も仲睦まじくチヨコと様々な百合話を楽しむのだった。

## おしながき

### ・チョコ

バーテンドー。好きな百合の系統は純愛路線。  
バーを経営しているがお客は基本的にケーキくらいしか来ない。  
お菓子作りも得意。

身長174。歳は26。バストはD程度。

### ・ケーキ

どっかの会社のOL。足繁くチョコの店に通う。好きな百合の系統はドロドロ路線。

ほぼ入り浸るようにチョコの店に居座る。何故か毎度検証だの妄想を話題とする。

身長162。歳は24。バストはC程度。

### ・生ハムサラダ……850円

### ・ジャッキー……500円

### ・チョコ盛り……500円

### ・本日のケーキ……800円

### ・ポテチ……500円

### ・三種のチーズピザ……1100円

### ・鮭とチーズのリゾット……1300円

・キノコの Pasta……1000円

etc . . .

## チョコとケーキ

とある街のとある路地裏にその店はある。

「チョコさーんっ、こんばんはーっ」

「あら、いらっしやいケーキちゃん」

「ふーい……今日もお仕事疲れたあっ」

「ふふっ、お疲れ様」

「んむうー、チョコさんの笑顔だけでわたしは頑張れるねっ」

「もう、あんまり調子いいこと言わないのっ」

「本当ですよーっ」

「はいはい。それで、今日は何を飲む？」

「んー……じゃあ、先ずはいつものっ」

「はいはい、ベリーーズミルクね」

「……んふふっ」

「ん？ なあに？」

「んー……手馴れてるなあって」

「当然でしょ？ バーテンダーなんだから」

「そうじゃなくなってるね？ こう、あー、わたしの好み、全部把握してるんだなあって」

「まあ、常連さんだから……はい、どうぞ」

「ありがとうございます……んーっ、おいひいっ、あまいっ！」

「本当にケーキちゃんは甘いお酒が好きだね？」

「そう言うチョコさんは今日もブランデー？」

「ん……そうだね、今日はカミュだよ？」

「おっとなーっ」

「ふふっ、それでもケーキちゃんと二つ三つしか変わらないよ？」

「むむむっ……それでも何か開きがあり過ぎる気がするっ」  
「それって私がおばさんってこと？」  
「のんのんっ！ チョコさんはいつ見ても綺麗だよっ」  
「そう言ってくれると嬉しいなあ」  
「本当のことだよ？」  
「ん……ふふっ。もう、上手ね、ケーキちゃん？」  
「あとは酔わせ上手になれたらね……チョコさん潰れないんだもん」  
「潰れないようにしてるだけよ？」  
「その加減ができるのが凄いっ」  
「そうかな？」  
「そうだよっ」  
「そっかー……ん、空いたね。次は何飲む？」  
「んー……あっ、なんかこの間の紅茶っばいお酒っ。あれ好きだったっ」  
「……そう？」  
「んっ。あれ飲みたいですっ」  
「ん、分かった。よいしょよいしょ……」  
「……可愛いなあ」  
「え？ 何か言った？」  
「え、あ、いやっ、なにもっ」  
「？ そう？」  
「う、うんっ」  
「変なケーキちゃん……はい、どうぞー」  
「わーいっ。これ、本当に綺麗なお酒だよねえ……味も見た目もミルクティーみたいで好きだなあっ」  
「……あんまり飲み過ぎちゃダメよ？」  
「はーいっ。んぐんぐっ」  
「もう、聞いてないんだから……」  
「美味しいから仕方ないですっ。ふいー……んむっ」

「カクテル飲んでそんな息吐く人初めて見たなあ」

「おっさんっぽい？」

「大分ね？」

「むむっ……いやしかしですぞっ、チヨコさんっ」

「なんですか、ケーキちゃん？」

「酔いが良い感じに回ってきたで御座いますっ」

「相変わらずお酒弱いね……そう言う所も可愛いけど」

「ふえ？　なんて？」

「んーん、何でも？」

「ふっふっふっ……まあこう言う感じになってきたら、そろそろ恒例のお話でもしましょうよ、チヨコさん？」

「はいはい、いつものね？」

「そう、いつもの　百合検証会をねっ！」

そのバーはとある街のとある路地裏にある。

マスターの名前はチヨコ。今日も今日とて閑古鳥かんことりが鳴く店にただ

一人の女性　ケーキが顔を見せた。

ケーキは一人陣取って今宵も仲睦まじくチヨコと様々な百合話を楽しむのだった。

## 1 肉食系百合について

とある夜の風景。

「世の中にはたくさん百合があるでしょっ、チヨコさんっ」

「そうね。そしてそれをお互い趣味にしてるわね？」

「今や同性愛ってオープンな感じですよねえ。ガールズラブ萌えっつて文化……素晴らしいと思いますっ」

「女の子がそれを言うのはおかしいのかもしれないけど……」

「でもチヨコさんだって好きでしょ？」

「大好きですっ」

「ですよねー」

「なんなんだろうっね、あの感覚は？ 儂いと言うか、胸が締め付けられると言うか……見ててキラキラしてくると思うの」

「分かりますよっ、すっごく分かりますっ。百合こそが純愛の結晶だと思えますっ」

「でも……百合も好き好きと言うか、人によってやっぱり趣味嗜好があつて、更には傾向も異なるのよね」

「チヨコさんはどんなものでも好き？」

「うーん……私は純愛物が好き、かな？」

「あはっ、恋愛脳っ」

「そんな風に言わなくてもいいでしょっ？」

「ごめんごめん、あははっ……でも、大人あーなチヨコさんからして、結構意外な感じかな？」

「そう？」

「うん。背も大きくて、胸だつてわたしよりあるしい……なにやりクールで知的で美人さんだし」

「普通だと思うけどなあ……ケーキちゃんこそ可愛らしい見た目の

割には濃い内容の物が好きなんでしょ？」

「うーん……やっぱり、こつ……たぎるぞつ、て感じのがいいなあ  
つて」

「なるほど、まあ分からなくもないけど……」

「ところで今日の検証なのですが、チヨコさん」

「ん、今日は何？」

「今日は」

・肉食系百合

「……肉食系百合？」

「ですつ」

「そもそも毎度思うけど、何をどう検証するの？ 目的は？」

「検証は実際にその系統を妄想して、目的としては改めてその感想を言う、かな？」

「まあ、系統も好き好きだけど……肉食系百合、かあ」

「少なくともないよねえ。むしろ……時代的に言えばこつ言つのか  
ら入った人が多いんじゃない？」

「確かにそうかもね？ 今じゃ草食系とかゆる系が流行ってるみた  
いだけ……」

「例えば神無月の巫女とかストロベリー・パニックから入った人た  
ちは共通認識として 女の子は無理矢理襲うものつてのがある  
と思うんだよね」

「あー……あるわね。確かにね……」

「千歌音ちゃんなんて純潔奪つちゃうし、静馬しずまさまに至ってはプレ  
イガールな上に刹那的快樂主義者だし……」

「あの頃つて襲つのが当然な風潮があつたわよね？」

「ん、でもマリア様がみてるは変わらずに純愛路線だったかな？」

「あれは本当に敬虔なる少女達の愛の物語だからね。 他も純愛つ  
て言えば純愛だけ……」

「神無月に関してはセカイ系でもあるし……でもエンディングは素晴らしいっ！」

「シムーンは？」

「あれはっ……でもドロドロしまくってるのは最高だからっ！ 本当にいい作品だからっ！」

「振り返ってみると、やっぱり時代の空気もあつたのかなぁ？」

「でも今だって結構キマシな物あるって聞いたよ？」

「そうなの？ 私、最近アニメとか見てないからなぁ……」

「まあ昔ほどくんずほぐれつって言うのはないみたいだけど」

「……裸で致しちゃうのとかないの？」

「ないないっ。それやったのはストパニとシムーンくらいだからっ」

「他にもある気がするけど、やっぱり時代を象徴するその二作品は思い出深いねえ……」

「でしょ？ んでもって、やっぱりこの時代は肉食系が多い訳です

よっ、チョコさんっ」

「ふうむ……ん、グラス空いたね。何飲む？」

「んー、おまかせでっ」

「はいはい。よいしょよいしょ……はい、クーニャンっ」

「に、にゃんっ……！？」

「そう言う名前のカクテルだよ？」

「な、なんだっ……ちよつとドキっとしたぁ……ん、これもおいひいっ、さっぱり桃味っ」

「それで、肉食系百合はケーキちゃん的にはどうなの？」

「うーん、そうすなぁ……わたしにとってはいわば原典だから、やっぱり当然と言うか、素晴らしいと言うかぁ……」

「なるほど。私も好きかなぁ」

「いやしかし未だ感想は早いっ。さぁ妄想タイムっ！」

『ケーキっ……好きよ、ケーキっ』  
『あっ、だめだよっ、チヨコちゃんっ……こんな無理矢理だなんてっ……』

『そんなこと言っただって、ケーキもまんざらじゃない癖に……ふふっ、期待した目してるわ?』

『してないっ、してないもんっ』

『そう言いつつ逃げないのね?』

『に、逃げられないんだもんっ……』

『ふふっ……ああ、可愛いわ、ケーキ……あなたの全てが欲しくなるくらいよ』

『ふあっ……チヨ、チヨコちゃんっ……』

『悪い子ね、ケーキ……私をこうも狂わせるだなんて。お仕置きが……必要ね?』

『あっ、やだっ、まっ』

「うん、肉食ね」

「こう、無理矢理にでも組伏せて言うこと聞かせて、更に貪るように愛を交わす……やっぱ悪くないねっ」

「それよりね、ケーキちゃん?」

「ん? なにかなチヨコさん?」

「何で私達がくんずほぐれつな事になってる妄想なの?」

「い、いやあ、同好の士だし、妄想しやすいし?」

「……普段から私で変な事考えてるの?」

「そつ、そんなわけないっ」

「悪い子ね、ケーキ……？」

「ふあつ……！？ ちよつ、チヨコさんっ！？ そんなっ、顔ちか

つ

「なんてね？ ふふつ、驚いてるね？」

「もつ……もつつ、イタズラが過ぎるよっ」

「ほらほら、大好きなお菓子あげるから機嫌なおして？」

「わーいっ、ケーキの為のケーキだーっ」

「今日のケーキはベリータルトですっ」

「チヨコさんの手作りケーキっ。 うーん、んまいっ！」

こうして夜は更けていく。

## 2 ツンデレ系百合について

とある夜の風景。

「チヨコさん、チヨコさん」

「ん？ なぁに？」

「べっ、べっ、チヨコさんのことなんて好きじゃないんだからっ」

「……どうしたの、いきなり？」

「あ、あははー…… ツンデレを試してみたんだけどお……どうだった？」

「うーん、急すぎて反応し辛かったかな？」

「ですよねー……あっ、あと今のは嘘ですよっ、好きですよめっちや好きっ」

「ふふっ、本当に？」

「本当本当っ。 ケーキ嘘つかないっ」

「そう？ けどどうしてまた急にツンデレな態度を？」

「いやあ、最近は何を見ても何を読んでも至る所にツンデレキャラっているでしょ？」

「確かにね。 けどツンデレってすっごく古くからあるよね？」

「定義が確立されたのは最近のことだとしても、超古い時代から創作なんかじゃ出てきてると思うねえ」

「それに、キャラクタじゃなくても、現実の世界でもツンデレな人って多いよねえ」

「あ、知ってるチヨコさん？ ツンデレな性格って男の人の方が多いんだってっ」

「え、そうなの？」

「うん。 多分だけど」

「多分なんだね……あんまり憶測で言っちゃダメだよ?」  
「でもでもお……基本的に女の子の方が積極的な感じしない?」  
「あ……結局は興味抱かせるためにする訳であって、最終的に立場は上なのを見越しての作戦だけだね?」  
「それ言っちゃダメだと思うっ。まあ、男の子の方がツンデレって言うか、好きな人の前では素直になれない人多いと思うんだ」  
「うーん……確かにそうかも……?」  
「それでね、わたしはこう思ったのです」  
「ふむふむ」  
「男の子の方が純情な人が多いんだあーっ!」  
「……そうなの?」  
「いえね、素直になれないってそう言う事でしょう? 恥ずかしい、勘違いされたくない、面と向かって言えない、良い恰好を見せたい等々……」  
「あ、そう言われてみればツンデレって強がりなのかもね?」  
「そうなのですっ。ツンデレって色々な定義があるけど、大体の共通する事として 純情、恥ずかしがり屋、後は過剰な自尊心があるよねっ」  
「それで、男の子の方が恥ずかしがり屋でプライドが高いの?」  
「……多分」  
「また憶測っ?」  
「でもでもっ、絶対に男の子の方がツンデレ多いよっ。 何の需要もないだろうっけどっ」  
「また酷く暴走してるけど……あれ、もしかしてだけど、今日のお題っ」  
「ふふふうーっ。 お気づきの通りっ、今回は」  
「

・ツンデレ系百合について

「でっす!」

「ある意味はこれも王道かしらね？」

「最早どんなジャンルにでも当然のようにツンデレはいるからね。いないのを探す方が難しいかも？」

「ツンデレの代表って言えば……やっぱりエヴァンゲリオンかな？」

「アスカだね。でも惣流はヤンデレだって言う人もいるし、式波はツンデレじゃないって言う人もいるし……」

「未だにツンデレ論争ってあるのね？」

「あるのですよ……例えばツンとデレの比率は九対一じゃないと認めないだとか、真のツンデレとは云々って語る人もいるみたいだよ？」

「どんなジャンルにもいるよね。自分の好みが絶対的で、他は全て認めないって言う人」

「“それも”ツンデレでいいと思うんだけどねー」

「まあ、でも昔はこう言う対立が一番多かったんじゃないかしら？」

「？　どんな？」

「“ツンデレの正しいデレ方”」

「あー……」

「異色な派閥としては“人がいない所ではデレデレするが、人のいる所ではツンツン”かしら？」

「……あれ？　それって今じゃ割とポピュラーなツンデレなんじゃ？」

「ところが昔はそうでもなかったのよ？　多くの人が、そんなのツンデレじゃないっ、て散々怒ってたもの」

「うーん、やっぱり皆の好みは違うんだねえー……」

「まあそれはそれとして、だけど……百合におけるツンデレ、だって？」

「うん。まあ、往々にして主人公がツンデレってパターンは少ないかな？」

「幾つかあるにはあるけど、確かに多くはないね」

「ヒロイン……まあ主人公も女の子だけど、そっちの方がツンデレ

「つてる方が多いよね？」

「こればかりは数多くあるジャンル共通のお約束なのかもね？」

「メインヒロインはツンデレしてて可愛い正義っ！ ってやつ？」

「そうそう。 何だかんだで昔から人気なもの、ツンデレは」

「でも昨今じゃ暴力とか暴言を吐くツンデレが大層な非難を受けてるらしいよ？」

「……………時代なのかしらねえ？」

「単に声が大きくなっただけかもしれないけど……………けどツンデレつ子を無理矢理組伏せる展開は最高だと思っんだっ」

「やっぱりドロドロした展開好きだね、ケーキちゃん」

「勿論っ。 特に女の子同士 百合におけるツンデレってすごい破壊力高いんだよ？」

「力も同程度、背格好も同程度、そして性別も同じだから……………確かに男の子に対するツンデレとは結構感じが違うかもね？」

「その通りっ。 では早速検証、アーンド考察妄想はじめっ！」

『わっ、わっ……………近いでしょっ、離れてよケーキっ』

『ご、ごめんっ。 人の波がすっこくてっ……………』

『もうっ、これだからケーキはいつもいつも……………ほんとと、あなたってトロくさいんだからっ』

『ごめんね、チョコちゃん……………わたしってばまた迷惑かけてばっかりだなあ、あはは……………』

『……………な、なによ。 別にそこまで怒ってないわよっ』

『え？ でも、今だって……………』

『べっ、別にっ……………本当に嫌なら一緒になんていないわよっ……………』

『ぶえ？ 今なんて……………？』

『あーもーっ、いいから手だしてっ、ほらっ……手、繋いでれば大丈夫でしょっ』

『ご、ごめんっ……』

『っ……そうやってすぐ謝るんだから。嫌じゃないって言ったでしょっ……ケーキのバカっ……』

「ううん、やっぱりツンデレも悪くないよねえ」

「相変わらず私がヒロインなんだね？」

「そこはまあ、ね？」

「まあいいけど……」

「ツンデレは直ぐに顔赤くしてモジモジするのが鉄板だよねえ。

それではそぼそつと本音漏らしたりね」

「今の妄想の状況は？」

「うーん、たぶんお祭りにやって来た感じ、かな？」

「人混みの中を手を取り合いながら歩く百合カップル……ツンデレちゃんが先導して、更には俯き加減で顔を真っ赤にしながら主人公の手を引っ張る画……うふふっ、キマシタワァっ」

「おおっ、チヨコさんのキマシがきましーっ！」

「やっぱり王道って言うのは素晴らしいと思うよ？ 下手に冒険するより、基本に忠実にするのが一番だと思っな」

「確かにねー」

「ふふっ……それより、ケーキちゃん？」

「んにゃっ？」

「グラス空いたけど、次は何飲む？」

「ん……んー、そうだなー……」

「……な、なんだったら……好きそうなの作ってあげるけどっ……」

「？」

「はっ！？　ちっ、チヨコさんが恥じらったような表情でそれっぽい台詞をぉーっ！？」

「なーんてね。　ふふっ、どう？　うまくできてた？」

「もっ、もう一回っ！」

「えー、またー？」

こうして夜は更けていく。

### 3 素直クール系百合について

とある夜の風景。

「 たっただいまぁーっ! 」  
「 ん。 いらっしゃい、ケーキちゃん 」  
「 うへへーっ、チヨコさんただいまーっ! 」  
「 んー、と……あれ? もう酔ってるの? 」  
「 今日は同僚と軽く飲んできましたーっ 」  
「 ああ、だから少し遅くなるってメールがきたんだ? 」  
「 そうそうっ。 うふふー、なんだか恋人同士みたい? 」  
「 営業的なメールのやりとりだけどね? 」  
「 ぶーっ……でも行きつけのお店の人と仲良くなると色々お得だよ  
ねっ 」  
「 お得かなあ? 」  
「 そうだよ? 今日みたいに、席を取っておいてもらえるし 」  
「 とは言っても……お客さんは相変わらずケーキちゃんくらいだけ  
どね? 」  
「 うーん、何でここには人が来ないんだろう……他のお客さんと遭  
遇した回数って数える程度だった気がする…… 」  
「 まあ、奥まったところにあるからね。 むしろ見つけたケーキち  
ゃんは凄いかもね? 」  
「 きつと何かしらの波動を感じたのかもっ。 同じ趣味を持つ者と  
うしが放つ百合百合エネルギーをっ 」  
「 感じ取れたら凄いわねえ。 ふう……んー、もう、暇過ぎて私  
も  
ずつと飲みっぱなしだったよ……はあっ 」  
「 何か香ってくると思ってたけど、アーモンド? 」

「ん、今日はゴッドファーザーを飲んでるの」  
「なんか格好いいっ」  
「アマレットの香りって結構面白いでしょ？ アーモンドっぽくて」  
「うんうんっ、何か香ばしいような、まるやかーな感じっ」  
「これと……今回はバーボンで作ってみたの」  
「……前から思ってたんだけどね、チヨコさん？」  
「ん？ なぁに？」  
「お酒の趣味が、こつ……大人過ぎませんか？」  
「そうかなあ？ こつという仕事していると自然とそう言う方向に行くからなあ……」  
「女の子でバーボンとかブランデー飲む子って見たことないよう……」  
「えー？ でもクラブとかでよくブランデーがっぼがぼ飲んでる子見るよ？ 結構飲む子は飲むけどなあ」  
「マジすかつ……わたしが幼稚すぎるのかっ」  
「ケーキちゃんのお酒の趣味、私がいいと思うけどな。 ザ・女の子って感じで」  
「そ、そうかなあ？」  
「そうそう、変に強がることもなく、本当に好みのお酒だけを飲むスタイルって立派な酒飲みだよ？」  
「うっ……この歳で酒飲み判定だとおっ……」  
「ほぼ毎日通ってる癖に否定はできないと思うよ？」  
「それはチヨコさんに会いに来るためですものっ。 そして来ればそりゃ飲みますよっ」  
「どっちが本当の目的なのやら……ん、それじゃあ何飲む？」  
「んー……じゃ、じゃあ、私も今日は頑張っつてバーボンを……」  
「……本当に？」  
「……うわーんっ！ やっぱリスコッチで……」  
「バーボンは癖あるからね、ウイスキーはやっぱりリスコッチから入った方がいいかもねー」

「……ちなみにスコッチとバーボンはどっちが好きなの？」

「やっぱりバーボンかなあ。こう、ガツンっ、てくるのがいいよね。スコッチは癖がなさ過ぎて逆に飲みづらいかなあ……はい、マツカランのトウワイスアップ」

「癖がないと飲みづらいつてなんすかあっ……あれ？ 意外と飲みやすいこのお酒っ」

「香りもいいでしょ？ 文字通り水で二倍にする飲み方だけど、テイステイングじゃよく皆やるの」

「へえー……何か意外、モルトってこんなにいい味するんだ……香りもほんわかしておいしいーっ」

「ふふっ、遂にお酒の道に目覚めたね？」

「うむむっ……これも全てチヨコさんがわたしを酔わせるからいけないんだっ」

「なあに、それ？ なんか私が悪者みたいじゃない？」

「だっていつだってチヨコさんは素直にストレートにクールにわたしを相手して言葉を向けるんだものっ」

「あれ、なんかようやっと今回のお題が見えてきた気がする」

「もっつ、これだから」

・素直クール系百合について

「素直クールは困るんだあーっ！」

「素直クールかなあ、わたし？」

「この間のツンデレと双壁をなすジャンルですっ」

「結構最近のジャンルだけど……しかし結構広まったねえ」

「原型としては“綾波タイプ”だと思うんだけど、どう思う、チヨコさん？」

「うーん、九十年代に見受けられたエヴァ現象……確かに“綾波タイプ”は凄く流行ったし、キャバクラだとかの触れ込みですら“綾波タイプ”、“綾波系”って単語が使われてたしね」

「つまりそれだけ魅力的だった訳ですよ。事実、“綾波タイプ”は多くのキャラに引き継がれ、あるいは影響を与えた訳ですよ」  
「だす？」

「だすっ」

「まあ、そうだね。確かにそれ以降からも美少女だけどクールで不愛想なキャラは大量に生まれたからね」

「その発展、進化形が 素直クールですよっ」

「……具体的にはどう言う所が魅力なの？」

「ふっふっふ……聞いちゃいます？ それ聞くのお？」

「聞かない方がいいの？」

「いやいや聞いてっ。 って言うか語るからっ」

「ふふっ、はいどうぞ？」

「鉄面皮てつめんぴだとか不愛想だとかって言われる子がですよ？ まるで当たり前のように、自然に 好き、って単語を言う……これだけでもその破壊力たるや恐ろしい限りなのですよっ……」

「うん……確かにそれはあるかもね。 自分から迫っていったり、感情の赴くまま……それこそ自分に素直なままに押し倒しにいったり、それで無自覚なのか知らないけど首を傾げたりする仕事……侮れないね？」

「今はこう言うキャラが多くていいよねっ。 そのほとんどはやっぱり機械っ子だったりするけど、それもそれでまたいいよねっ。 人の姿をした機械だけど心を持ってて、更には美少女とキャッキャウフフするのはすんばらしいっ」

「……けどね、ケーキちゃん？」

「ふえ？ どうしたの、チヨコさん？」

「私はね、素直クールの歴史には結構詳しいの」

「えっ、何それ」

「先も言ったけど、この素直クールって言うのはいわゆる新ジャンルだね？ これが生み出された当初と今で言う所の素直クールって……すっごく別物って言うか……」

「な、なにがどう違うの……?」

「そうね、うーん……素直だし、クールなのは変わらないんだけどね……あ、うん、あれ、あのキャラクタ知ってる?」

「? なんですか?」

「生徒会役員共って言う作品のシノ生徒会長」

「……あの下ネタ漫画あ? それがどうしたって」

「あれがまんま初期の素直クールなのよね」

「……えっ」

「もう、所構わず“昨夜は激し過ぎたな、しかし嬉しかったぞ、早く孕ませてくれ”とか“今日はおもちゃを入れっぱなしできてしまった、溢れて仕方がない”とか……そう言うの平然と口にするキャラだったから」

「素直すぎるっ!?!?」

「クールな性格……ブレなさ過ぎて逆に周囲が引くって感じだったけど、今となつては大分柔らかくなったね……なんか私、親の気分だなあ……」

「けっ、けどっ、今時の素直クールはそんなにひどくないって言うか、本当にいいものだよ?」

「うーん、でもあの頃の印象が強すぎてね……」

「な、ならっ、ここは毎度の検証、アーンド考察妄想タイムっ!」

『……ケーキ。ちよつとこつちに来て』

『ん? どうしたの、チヨコ?』

『いいから。ほら』

『はいはい……お、およ? なに? いきなり肩に手をのせて』

『好きよ、ケーキ』  
『……はひっ?』  
『あなたを見てると胸が苦しいの。ねえ、どうして?』  
『ち、チヨコ……? あのっ、距離がっ』  
『私ね、気付いたの。もう一度言っわ、ケーキ。私はあなたが好き。この胸の苦しさは、あなたを想うから生まれるの』  
『わっ、あっ、ちよっ、口っ、口がっ』  
『ねえ、好きって言って。じゃないとその口、永遠に塞いじゃうんだから』

「ふうむ……確かに素直だしクールだね?」  
「今時の素直クールはこんな感じなのっ」  
「でも迫る所はやっぱり変わらず……肉食系の系譜もあるのかもね?」  
「やっぱり百合の根底は肉食だからじゃないかなあ?」  
「そうねえ……ちなみに、今の妄想の状況は?」  
「えーと……生徒会室で幼馴染の女の子たちがくんずほぐれつになりそうな所、かな?」  
「むむっ……夕暮れの校舎、誰もいない生徒会室で迫った素直クール……幼馴染は困惑をするけど、しかし素直クールに唇を塞がれ、意識が蕩け始めると同時に抵抗を止め……キマシタワーっ」  
「おおっ、今夜もチヨコさんのキマシがきましーっ!」  
「自分の気持ちに素直だからこそ好意に気付くとノンストップになる。そういつた剛直さって言うのは素直クールだからこそ見せられるのかもね?」  
「そうなのですよそうなのですよー。ふふふー、お分かりいただけたかなあ?」

「ん……そうね。ところで ケーキちゃん？」

「ふえ？」

「私のことは好き？」

「もっちらんっ」

「私も好きよ。とても。大好き」

「ぶふあうっ!!」

「わっ、あわっ、ちよっ、大丈夫ケーキちゃん!? すっごい勢いで鼻血がっ」

「ちっ、チヨコさんがやるとっ……破壊力ががががっ!」

こうして夜は更けていく。

#### 4 ヤンデレ系百合について

とある夜の風景。

「 チョコさんがいないと生きていけないっ 」

「 ? どうしたの、急に? 」

「 ああ、チョコさん、チョコさんっ……その飲みかけのグラス舐め  
回したいっ 」

「 ……け、ケーキちゃん? 」

「 ふふっ……そうだ、そうだそうであつ。 こんなにも恋しいんな  
ら、どこにもいけないようにすればいいんだあ 」

「 あ、警察ですか? その、不審者が 」

「 ちよいちよいっ! うそうそっ、冗談に決まってるでしょあー  
っ! 」

「 ふふっ、私の通報も嘘だけどね? 」

「 あ、あせつたあーっ……危うくポリスマンのお世話になるところ  
だったよあ…… 」

「 でも、本当に危ない人みたいになってたけど……一体どうしたの  
? 」

「 ふっふっふ……いえね、チョコさん。 この世には様々なジャン  
ルがあると言うのは既にお分かりかと思えますけどですがっ 」

「 けどですか? 」

「 ですがけどっ 」

「 うん、それで? 」

「 近頃流行りのおんにゃのこはどんな感じか知ってる? 」

「 流行り……お尻の小さな女の子? 」

「 ぶっぶーっ、キュートなハニーちゃんのお話じゃなくて、ジャ

ンルですっ、ジャンルっ」

「うーん……ジャンルに限ると少し判断し辛いなあ……」

「ちっちっち……こればかりは悩む必要など皆無っ」

「そんなに大人気なの？」

「そうですともっ……多分」

「また憶測っ？」

「だってだってーっ、正確な数値とか出てる訳でもなしーっ」

「まあ確かにその通りだけど……」

「でも本当にここ最近は一発的に増えてきてるんですよっ」

「へえー、一体なんだろうっね？」

「もうっ、本当は分かっていたりする癖にっ」

「ん……まあ、既に初っ端の言葉の数々からしてバレバレだよな？」

「そもそも通報されるレベルだしね？」

「けどそれがまたこのジャンルの」

・ヤンデレ系百合について

「ヤンデレの良い所ですよっ」

「……本当、この所はこれの人氣が凄いわね？」

「最早語るまでもなく……これの火付け役となったのは、そうっ、誰もが知るあのお方っ！ ナイスボートと言うネットスラングを誰も一度は耳にした事があるはずっ！ それこそはスクールデ」

「SHUFFLE！の楓ちゃんかえでね？」

「……え？」

「え？ 何か可笑しかった？」

「え……いやいや、何が可笑しいって、そんなの何もかもに」

「兄を愛するがあまり全裸で襲ったり軟禁しようとしたりヒロインに対してシンジャエバインダーって言葉を吐いたり、しまいには伝説となった空鍋混ぜ混ぜをしてくれた楓ちゃんが元祖で間違いないよね？」

「はいっ、すみませんでしたっ」

「よろしいっ」

「……あれ、なんだあ？　もしかしてチョコさんもヤンデレが好き……？」

「そうね、嫌いじゃないよ？　スクールデイズの言葉ちゃんみたいな守護タイプのヤンデレもいいと思うよ？」

「あ、これガチで好きな感じだね？」

「んー、ヤンデレの定義も多くあるからね。中には、それメンヘラじゃないの？　って思うのもあるけど、それでも製作者側がヤンデレって言ったならそれまでだしね？」

「かなりメタい事言うねー……」

「楓ちゃんはまんま執着タイプだったね。これはスクイズの世界ちゃんにも言えるかなあ」

「えっ、あの子もヤンデレなのっ？」

「ヤンデレよ？　まあメンヘラって判断する人もいると思うけど、私としてはヤンデレの扱いでもいいんじゃないかなって思うな」

「け、けど、最終的に誠死ねっ　あ、間違えた、誠めっ殺してるよ？」

「あれはまあ感情の暴走じゃないかな？　ヤンデレは基本守護……傷つけることを良しとしない、あくまでも護る立場でしかないって見解が多いけど、手に入れる為に意中の相手を監禁軟禁したり四肢切断するって発想は中々凄いでしょ？」

「た、確かに……それこそ病んでるっ……」

「けど、中には本当に一切の暴力を振るわないタイプもいるからね。それが依存タイプとか、後は……あまり見られないけど、墮落タイプ、かな？」

「墮落タイプう……？」

「うん。これはすごいよ？　何がすごいつて　お薬ませませしたご飯食べさせたりして相手の意識を薄弱化させて、食事から排泄、ほか全ての面倒を見るタイプかなあ」

「…………えっ」

「多分、ヤンデレ系では一番ピュアなタイプ、かつ一番無害なタイプかな？」

「いやいやいやいやっ、それは恐ろし過ぎるよっ」

「ベッドの上に拘束するでもなく、ましてや暴力を振るって無理矢理自由を奪うでもなく……………活力を奪い手段を放棄させる手口。多分ヤンデレの極地だね？」

「だ、だから墮落タイプ……………相手から己にはまるように仕向ける策士っ！」

「とは言えお薬用意したり幻覚幻聴作用や怠情感に包まれるような葉っぱをモクモクさせるのは立派に犯罪だけだね？」

「こうして聞くとヤンデレってやっぱり怖いねっ」

「けど純情支配タイプも可愛いよ？」

「純情……………支配……………？」

「執着タイプに近いけど、この場合は暴力を　当然のように行使するタイプかな？　躑として指切り落したり、体に穴開けたり」

「かわいくないよっ！」

「うっん、その後が凄く可愛いんだよ？　自分でやった事に嫌悪して、たまに嘔吐しちゃう子もいるね？　あとは延々とごめんねごめんねって泣きながら謝罪を繰り返したりする子もいるねっ」

「あれ……………なんか事後の話を聞くとかわいく思える不思議っ」

「で、このヤンデレはね、やっぱり　百合だからこそ最高の威力を發揮すると思うの」

「ほほう、それはまたなぜなにゆえっ？」

「背景が明確だからだよ？　同性愛に悩んだ末に気を違えてしまった、って言うのが往々だけ……………やっぱり同性だからこそ少女達には不安を募らせて日々焦る訳なの。それで男の影にイライラしたりして、ついに爆発して　飼っちゃっ、ってね？」

「ふ、ふうむ……………確かに男の場合でのヤンデレヒロインって、結構主人公の自業自得な事ばかりで感情移入し難いし、かと言って無理

矢理ヤンデレに迫られてるのは見てて納得できないっ」

「その点、百合って言うジャンルは背徳感やらが最初からある訳で、つまりは罪の意識を自覚していたり不安を抱えているのが或る種は前提なの。それがあるからこそに ヤンデレに発展するのは至極当然っ」

「なっ、なんて説得力っ……！ チョコさんはヤンデレマスターだったのかあっ……！」

「ふふっ、だから今日はこの私が証明してみせるね？ さあ 検  
証考察妄想の時間だよっ……！」

『……おはよう、ケーキちゃん？』

『……ん……チョコ……』

『どうしたの？ やっぱり“まだ”具合悪いの？』

『うん……なんか、頭がぼーっとして……それに、なんだか……ダ  
ルくて……』

『熱はないけど……そうだね、それじゃあ……今日“も”学校休も  
うか？』

『ごめんね……ここ最近、ずっと看病してくれて……学校まで休ま  
せちゃってるし……』

『んーん、平気だよ。 私は ケーキちゃんのお世話が出る  
だけで……一緒に居られるだけで幸せなのっ』

『そっかあ……』

『ん……お腹空いた？』

『んー……食べる気もおきない……あ、でも、トイレに行きたいか  
なあ……』

『分かったよっ、はいっ、それじゃあ“いつもみたいに”桶で受け

止めてあげるね?」

『うん……(なんだろう……何が可笑しい気がする……けど、もう、何も考えられないや)』

「っ……なんだっ、これっ……なんだこれえっ!」

「言葉の節々から伝わる異常性。それを臆面もなく口にするヤンデレ……実にプライスレスっ」

「なんだろう、寒気がするはずなのにっ、なのにつ　　なんだろうこの萌え感はず……!」

「ヤンデレはいわば厳選茶葉……デレ十割と言う最強無敵のラブラブ思考状態だからね、手段や方法はまた別にしても、とても純情で無垢で素直なの」

「愛するがあまりに仕出かす行為……許されざることだとしても、その気持ち、そして想いの深さは如何なるジャンルをも凌しのぐかもしれない……!」

「まあ、そう言う事で　さて、と」

「……ん? あれ……ええと、チヨコさん?」

「ん? なあに?」

「あの……何で店の出入り口のカギをしめたのかな……?」

「え? 何か可笑しいの?」

「……ん?」

「だって　今日からケーキちゃんはここで暮らすんだよ?」

「えっ」

「何も心配いらないよ? 必要な物は全部用意してあげる。ご飯も作ってあげるね? えっちなことだって何でもしてあげる。だから」

「 わっ、あわっ、チヨコさんっ、チヨコさんっ!? その手錠  
なにつ、やだっ、まってっやめてええええっ! 」

「 なぁんてねっ 」

「 ふえあっ!?! 」

「 ふふっ、流石にこの私がそんな真似する訳ないでしょ? どう?  
驚いた? 」

「 おっ、驚いたよおーっ! こわかったよおーっ! 」

「 あらら、これはやり過ぎたわねえ…… 」

「 もう怒ったっ、もうもうっ! ケーキはお怒りですよっ! 」

「 それを見越しての はいっ、本日のケーキでえすっ 」

「 わーいつ! ケーキの為のケーキだあーっ! 」

「 ふふっ……本当に可愛いわねえ、ケーキちゃんは 」

「 はぐはぐっ( )……迫られた時、不覚にもドキがムネムネしたのは  
秘密だぜっ( ) 」

こうして夜は更けていく。

## 5 姉妹系百合について

とある夜の風景。

「チヨコおねえちゃんっ」

「うっ……なんて破壊力なのっ、その呼び方っ……」

「ふっふっふっ……どうかな、チヨコさん？ おねえちゃんって呼ばれるの……結構いいっしょ？」

「良いなんて物じゃないよ……最高だよっ」

「そ、そこまで？」

「ん……私って一人っ子だったからね。 ケーキちゃんは姉妹とかいるの？」

「わたしには兄がおりましてですねー。 とは言え歳もすっごく離れてるから兄と言うよりかはお父さんって感じだけど」

「でも兄弟姉妹がいるっていうのはいいことだよ？」

「そうかなー？」

「そうだよっ。 特に妹は凄く欲しかったなあ……」

「憧れだったの？」

「ん、そうだね。 だって可愛いじゃない？」

「確かに年下の女の子はきゃわたんだねっ」

「それに、きつと背も小さくてさ？ 幼い頃だったら、多分私の背を一生懸命追いかけてくるんだろっうなーとか妄想してたなあ」

「おねえちゃんあそんでーっ」

「きゃーっ！ 遊んじゃうよーっ、もうばりばり遊んじゃうよーっ  
！」

「こんなにテンションの高いチヨコさんは初めて見るなあー」

「とは言え本当に子供一人って結構寂しいものでね？ まあその分

お小遣いとかお年玉は他の子達より多くもらってたけど」

「あつ、一人っ子の権利だつ、それ皆が羨む特権だよ」

「おまけに親戚も多かったからお正月はうはうはだったよ？」

「ちなみにお年玉ってどうしてたの？」

「ケーキちゃんは？」

「わたしはゲームとお菓子で直ぐ使い切っちゃうつ」

「ふふつ、ケーキちゃんらしいね？ 私はお洋服とか、かな？」

「ふえー、若い頃からおしゃれ好き？」

「ん、そうだねえー」

「いつも思ってたけど、チョコさんって何着ても似合うよね。大  
体ブラウスばかりだけど……前にワンピース着てるの見た時、本  
気で見惚れたよお」

「背の関係もあるのかな？ 後は、まあ……あんまり太ってないか  
らね？」

「お酒ばかり飲んでるのに何で太らないのー？」

「それはケーキちゃんもでしょ？ でも余裕こいてると後々悲惨  
な事になるからね、今の内から節度を保ち健康的なドリンク生活を  
ね？」

「はあーいつ」

「うむつ、よろしいつ」

「しっかし本当にテンション高いねえー。これなら今日のお題は  
心底喜ぶかな？」

「ふふつ、どうかなあ？」

「そうはいつでも、それだけ」

・姉妹系百合について

「姉妹萌えしてたら嫌でも分かるよお」

「いやね、ほら、もうお決まりって言うかお約束事みたいなジャン  
ルでしょ、姉妹物って？」

「まあ、多くのジャンルの近親恋愛ってメジャーな扱いになってるよねえ」

「いつから流行ったのかは明確じゃないけど、それでも形は様々だよな。義理の兄弟姉妹も含めたら恋愛のパターンはほぼ何でもありだしね？」

「百合作品だと、やっぱりキャンディーボーイが有名？」

「そうだね、あれはショート作品だけどとてもいいよね。濃すぎず、くどすぎずのあっさりテイストが逆に好印象だね？」

「同じピアスをつけるシーンはすごい、こうっ……キュンっってきたなあ、わたしっ」

「あれはいいよねえ。なんだったら私達もしてみようか？」

「そう言えばチヨコさんもピアスしてるね。それボディピアス？」

「そうだよ？ 12ゲージ」

「軟骨の所痛くない？ ワンポイントで可愛いけど……うっっ、わたしは開ける勇気がっ……」

「大丈夫大丈夫、ニードルでぐさっ、ぶすっ……で終わるから」

「やっばやめますっ」

「まあ、この年でお揃いって言うのも可笑しいしね？」

「しっかし、姉妹愛って言う……どうなの？」

「ん？ なにが？」

「萌えポイントって大量にあると思うけど……でも、これもやっばり好き好きだと思うんだあ」

「そうね……例えば歳の差が大きい方がくる人もいれば、双子が至高って思う人もいるだろうね？ 他にも義理の関係が最高って言う人もいるだろうし」

「ちなみにチヨコさんには何が良い？」

「うーん、そうだねえ……意外とどれもいけるんだよねえ」

「なんとっ……この食いしん坊めっ」

「褒めてるの？」

「もちろんっ」

「ふふっ、ありがとう。 まあ、うーん……書いて言うなら、やっぱり歳は離れてるほうがいいかなあ？」

「それは何で？」

「だって折角の姉妹なんだよ？ それだったら大胆に十歳差とかあってもいいと思うんだ」

「それはそれで別のジャンルにもいきそうだねえ」

「けど、血の繋がりがある訳だから関係が希薄って訳じゃないんだよ？ しかもロリ妹だよ？ ロリ妹っ」

「あれ、もしかしてロリ属性持ってたの？」

「意識はしてないんだけど、こう……小さな女の子が頑張って背伸びする姿って最高だと思わない？」

「例えば？」

「お姉ちゃんにいつぱい好意を伝えてるのにまともに相手にされない。 それならいつそ行動で分からせようとキスをするけど、結局スキンシップと思われて拗ねたり、次こそはって奮起する姿」

「最高っすねっ！」

「血の繋がりがりってやっぱり背徳もあるけど、なによりも互いが理性をいつ崩すのか、いつ暴走して愛を伝えてしまうのかってところも魅力だと思っの」

「元々両想いの場合は見てるこっちがヤキモキするけど、あれもいいもんだよね……」

「それで、家族の目を盗んでは隠れてイチャイチャしたり、一緒にお風呂入りながらにやんにやんな事しそうになったり……夜寝る時は手を繋いで向かい合って寝るとかね？ 肉親だからこそその距離感だと思わない？」

「恋人同士とはまた違う刺激や緊張感かあ、確かにそれもあ……」

……

「近すぎず遠すぎずな距離感。 いつ壁を破壊して気持ちに素直になるのか。 そして どちらが受けて攻めなのかっ、妹攻めもいいと思うっ」

「だめだめ、ダメだよチョコさんっ、あんまり過激発言はダメっ。  
このお店では基本まったりのんびりなんだからっ」  
「今日も中々メタいこと言うね、ケーキちゃん？」  
「兎に角っ、そんな夢と希望に満ちた姉妹百合が如何なる可能性を  
秘めているのか……いざ検証考察妄想タイムっ！」

『チョコおねえちゃん、一緒に寝てもいい？』

『ケーキ……？ どうしたの？』

『ん……怖い夢みたの……』

『そう……ん、ほら、入りなさい？』

『んしょ、よいしょっ、はふうっ……おねえちゃんっ』

『あっ、こらっ……もうっ、夢は口実？』

『だってえっ……さみしくってっ……』

『甘えん坊さんね、ケーキ？』

『だめ……？』

『分かってて聞いているんでしょ？ ふふっ、ずるい子ね』

『おねえちゃんだってずるいよ、いつもいつも……そのおっ……』

『……余裕だから？』

『……うんっ……』

『ねえ、ケーキ。こっち向いて？』

『なにっ　んっ……』

『……ふふっ。ねえ、私の胸の音聞こえる？』

『っ……ドキドキしてるっ』

『可愛い妹相手にね、お姉ちゃんは……こんなに緊張して、こんな  
に　興奮してるのよ、チョコっ……』

『あっ　まって、やだあっ、おねえちゃんっ……』

『好きよ、チヨコ。だれにも渡さない。お姉ちゃんとずっと二人きりで……二人だけで幸せになりましょう?』

『……は、いつ……』

「ぶふうっ……!」

「わあっ! チヨコさんが鼻血ふいたあっ!」

「うぐっ、はうっ……はあっ。ごちそうさまでしたっ」

「そんなに満足してただけとは……やっぱり姉妹物はいいのかな?」

「そうだね……やっぱり姉妹での恋愛って多くの要素を持つけど、私的には年の差から生まれる姉の余裕とか妹の必死な様子……そして自分より年下相手に余裕を失ったり興奮してしまう姉の気持ちだとかにラブズツキョンしちゃうかなあ」

「結構細かい所までこだわりがあるんだね?」

「でも義妹や義姉とかもいいと思うよ? 最近でもそんな漫画が人氣出てきてるみたいだし」

「へえ……」

「……ね、ねえ、チヨコちゃん?」

「ふえっ?」

「その、ね……? 今日のお代……半分でいいよ……?」

「えーっ、本当に?」

「そ、その代わりに」

「……ありがとうっ、チヨコおねえちゃんっ!」

「はうあっ! さっ、さいこうっ……!」

「ぶっぶっぶっ……ついにチヨコさんの弱点を見つけたぜっ」

じじして夜は更けていく。

## 6 ハーレム系百合について

とある夜の風景。

「……ん、そろそろかな？」

「チヨコさんっ！ こんばんみゃっ！」

「ふふっ……予想ぴったりに来たね？」

「およ？ もしかして待つてくれたの？」

「んー、あんまりにも暇過ぎたから、いつくるかなって考えてたの」「そっ、そんなっ、まさかこのわたしを待ち侘びていてくれてただなんてっ」

「だって相変わらずお客さんがこないんだもんっ」

「本当に見事なくらいに人いないねえ……まだ十時だよ？」

「寧ろゴールデンタイムだよねえ……はあっ、立地条件悪すぎたかなあ」

「でもでも、わたしとしてはこう言うくらいが落ち着くかなあ」

「……そう？」

「んっ。 何と言うか、わたしだけの秘密の隠れ家、みたいな？」

「あー、その気持ちは分からなくはないねえ。 けど……経営側としては、ね？」

「ですよー……」

「折角新メニューとかオリジナルカクテルとか用意してるのにね……」

「チヨコさんのお店は甘味が豊富だよねえ。 スイーツ美味しいっ」

「まあ、基本女の子をターゲットにしてるからね？」

「ま、まさかっ……女の子をお持ち帰りしたことがあったりっ……！？」

「いやいや、そう言う目的じゃないよっ」

「なんだあ、よかったっ。まさかチョコさんがそう言う真似する訳ないよねえ？」

「私は純愛派だからね？ 運命の出会いとかいまだに信じてるもん」  
「なにそれ可愛いっ。ちなみに今まで運命を感じたことは？」

「んー……まあ、何回かあるかなあ？」

「本当っ？ その進展はっ？ って言うか相手はやっぱりおにやのこっ？」

「それは秘密ですっ」

「えー？ ケチーっ」

「ケチかなあ？」

「あっ、分かったぞっ、やっぱりチョコさんは色んな女の子を食べてきたんだなっ」

「ちよつと、人聞きの悪いことを言わないのっ。そもそもそんな事実はないよっ」

「でもでも、チョコさんは美人だしクールだしっ、とっかえひっかえしてそうっ。 いやむしろ」

・ハーレム系百合について

「ハーレムをつくってそうっ！」

「どうしてそんな発想に行き着くのかな……」

「いやあ、やっぱり誰もが憧れることだしね？」

「うーん、まあ分からなくもないけど……少なくとも私はそんなモチなかつたし、ハーレムなんて考えはなかつたから」

「それはやっぱり純愛派故に？」

「それもあるかもね？」

「けど百合って基本ハーレムが多いよね？」

「そうだねえ。ストパニにしてもマリみてにしても、他最近の作品も個人に多数が愛を寄せてそれを受け入れる主人公が多いね？」

「これってなんでだろうね？」

「勿論製作者側の願望もあると思うけど、けどこれはやっぱりあの作品が全てだと思うのよね」

「あの作品？」

「うん。ある意味では百合作品の元祖とも呼べるかな？」

「えっ、なにそれっ。そんなのあるの？」

「時は二千三年の作品なんだけど、この作品があったからこそ……ストロベリー・パニックやマリアさまがみてるが生まれたと言われるね？」

「ええっ。何それ偉大っ」

「それこそが 少女セクトだね？ 巻数は全二巻だし少し古いけど……これこそが百合の基礎を築いたよね。学園、ハーレム、そして 肉食イコール百合になつた傑作だよ？」

「ええと……ん？ これもしかしてアダルト作品……？」

「元は成人向けの雑誌で掲載されてたけど、販売は青年枠だね。けど 毎話エッチしてるから未成年の子は読むの止めようねっ」

「……毎話エッチいっ！？」

「うん。しかも全話キャラ別だし、結構生々しいよ。癖のあるコマ割りとか台詞回し、あとは展開も独特で少し苦労する人もいるかもだけど……なんだろうね、魅入るよ、本当に」

「あ、なんか都合よく手元に置いてある。どれどれ……ええっ！？ 本当にエロいよこれえっ！」

「成人枠で単行本は売るべきだよねえ」

「でも本当に今の百合作品に共通する事ばかりだ……学園で、しかも寮生……あ、しかも大筋はハーレムだっ。凌辱とか複数姦まであるっ！？」

「全てを出し切って、これからストパニ……つまりは肉食系、そしてマリみて……つまりは敬虔系に分かれて、更にそこから枝分かれして……って感じで今に至るかな？ 異色としては処女はお姉さまに恋してる、みたいな男の娘物とかかな？」

「何これ偉大すぎいつ！ しかも終わり方が一番胸キュンするとか卑怯すぎいつ！」

「しかもこれ、OVA化されてたのよね。 まったく気づかなかつたわ……不覚」

「本当っ？ 後で借りなきやつ」

「まあ、兎角……ハーレムって百合にとつてはなくてはならない要素なんだよね？ アダルトゲーも然りだけど、複数愛って見ている側も満たされるし、何より少女セクトみたいに背景が確りしていると破壊力は抜群だよ？」

「プレイガール物ってドロドロしてて好みだったけど……そうかあ、理由づけがあると妙に納得できちゃうねえ……」

「ハーレムはつまり肉食の派生と言うか、そのうちに含まれるかもだけど……けどそれって肉欲よりかは心を満たす目的が多々あるから、これは寧ろ草食系に成り得るのかもね？」

「ふうむ、身体を求め合う事と心を求め合う事……そこに恋愛感情があり、他の子達に負けまいとお姉さまに群がるハーレム娘たち……それを迎え入れるお姉さまの胸中は当人のみが知る所……」

「しかもそんなお姉さまには実は想い人が居て、けれどその人はちつとも相手にしてくれない。 ハーレムの子達はそんなお姉さまを癒さんとする為に、己の欲求は他所にして誠心誠意尽す……って言う設定もいいね？」

「なにこれ素敵っ！」

「ハーレムは害悪ではないよ？ まあどう言う目的により形成されたのが重要だけど……主従関係にある者同士がちゃんと意思疎通をとりあって互いの気持ちやら尊厳を守ればそれはとても平和で美しい形だよ」

「た、確かにっ……そう思うと本当に少女セクトうめえ……」

「そんな訳で ハーレムに関する検証考察妄想タイムはじめっ」

『お姉さまっ、お姉さまお姉さまあっ……!』

『ふふっ、ケーキ……今日は激しいね?』

『だってだってっ……ここ最近、全然かまってくれなかったじゃないですかっ……』

『ごめんなさいね……けど分かって、ケーキ? 私は皆を愛しているの』

『お姉さまっ……』

『……こんな私を許して。私はあなた一人を特別視できない』

『……いいんです。それでもいいんですっ……』

『んっ……ケーキっ、そこはっ……』

『お姉さまが私以外の人を見ていようと、本当は好きな人が居たとしてもっ　それでもいいのっ』

『あっ……きもっ、ちいっ……ケーキいっ……』

『今は私だけを見てっ、お姉さまっ……いっぱい幸せにしてあげますっ』

「　　けっ、健気だっ……とても純心だあーっ!」

「ハーレムの醍醐味ってこう言う所にあるよね。　自分の気持ちを優先する　訳じゃなくて、慕う側の全てを尊重する……実に献身的だよね」

「プレイガールなのになにこの純愛っぱい感じ。　不思議っ!」

「純愛で間違いはないよ?」

「え? そうなの?」

「そつだよ？ だって皆を愛してるんだもの。そこに差異はなく、特別も特殊も存在しないならそれはとても初心で純情純心だよ？」  
「とは言え手当たり次第手を出してるストパニの静馬しずまさまみたいなタイプもいるから、やっぱり一概にどうこうは言えないよねえ」  
「あれも背景があるからああなっっちゃったって理解するまで結構色んな意見があるだろうねえ」  
「んむう。 きっかけ、やっぱり百合は深いなあー……………」  
「そつだねえ…………ん？ あれ、メールだ」  
「おつ。 お友だちさん？」  
「ん？ ん……………」  
「相変わらずメール打つときは集中してるなあ……………」  
「…………ふふつ。 よいしょ、よいしょ……………」  
「…………むむう」  
「よしつと…………あれ？ どうしたのケーキちゃん？」  
「べつつにーつ……………」  
「あらら、拗ねちゃったのかな？」  
「だってさー…………わたしがいるのにつ、もつつ。 お仕事中はケーキを見ないのっ」  
「ふふつ…………ごめんね、寂しい思いさせたね？」  
「むうつ…………頭撫でてくれたら許しますっ」  
「現金ねえ…………ほら、よいこよいこっ」  
「はふうーっ…………チヨコおねえちゃんだいすきっ！」  
「はづつ！ おつ、おねえちゃん呼びキマシタワーっ！」

こうして夜は更けていく。

## 7 誘い受け系百合について

とある夜の風景。

「　　ぷへあうっ……………」

「今日は一段とよく飲むね、ケーキちゃん？」

「んむうっ……………なあんか疲れちゃってっ……………」

「激務だったのかな？」

「そうなんですようっ……………もうくったくたでえ、はあ、疲れたあー

……………」

「お疲れ様っ」

「ううっ、その労わりだけでも十分すぎる程に嬉しいっ！」

「ふふっ、相変わらず素直な性格だね？」

「素直って言うかあ……………折角癒されにきてるんだし、取り繕っても

なあって思うところなるんすよあ」

「まあそれもそうだねえ。でも癒しがあるって言うのはいいこと

だよ？」

「そうかな？」

「そうだよ？　あるとないとじゃ雲泥の差だよ？」

「んー、まあ、言われてみれば確かに……………」

「　　ふふっ」

「んにゃ？　なに？」

「んーん？　なんかね、このお店を癒したと思ってってくれてるんだな

あって思っつて」

「お酒も勿論美味しいけど……………やっぱりチョコさんとお話するのが

第一の目的だからっ」

「あら、もしかして口説いてる？」

「ふふーんっ、どうでしょうっ」

「ふふっ、なあに、それ？」

「偶には大人の駆け引きってやつをやってみたいのですよっ」

「大人の駆け引きかあ……ケーキちゃんって今二十四歳だっけ？」

「うっ……とっ、歳の事は言わないでほしいっ」

「何で？ まだ焦る歳でもないでしょ？」

「でもあと一歳でアラサーだよっ」

「それ言われると私もアラサーだけど？」

「あっ、ごめんっ、そんなつもりはなかったっ！」

「ふふっ、別に気にしてないよ？ 大人の魅力って馬鹿に出来ないし、経験する事で得られる事もあるしね？」

「人生経験豊富そうだよねえ、チヨコさんって」

「どうかなあ……結構普通に生きてきたつもりだけどね？」

「けど普段の仕草から何から何まで……すっごく大人びてるしクールだし、何より言動が、こう……ぐっってくるよっ」

「言動？」

「そう言動っ。クールに反しての甘い声や反応っ、まるでそれって」

・誘い受け系百合について

「誘い受けてるような感じがするよっ！」

「あら、またコアと言うか高等な方向の話になったね？」

「近頃ようやっとこれも確立されたよねえ」

「昔からあると言えばあるけど……通常の恋愛物よりかは同性愛の作品で多く見られるね？」

「ねえねえチヨコさん、具体的に誘い受けて何がどういう事なの？」

「あれ？ 自分で口にしたのに分からないの？」

「うーん、その、何がどう正しい誘い受けなのかが未だに判断つか

なくて……」

「そうだね…… ようは相手を性的な意味合い等も含めて誘惑して襲うように仕向ける事だね？」

「……なんか淫乱っぽい！」

「事実淫乱な性格が多いね？ いわゆる隠れビッチとかかなあ？」

「むむつ、でも誘惑誘致するキャラってフェロモンむんむんで情欲をそそるよねえ……」

「あれも良いよね。私もなんだかんだで淫乱キャラって嫌いじゃないよ？」

「そうなの？」

「うん。ただし肉欲や性欲に堕ちたNTRとかは大嫌いだけど」

「あれは安易だよねえ。単に性欲に負けたからであって、じゃあ今以上にエッチが上手い人が現れたら結局はそっちに靡いちゃうんだもんね？」

「そうなるよねえ。説得力に欠けてるし、第一状況の発端から結果に至るまでが安易な上に安直でまるでつまらないかなあ……」

「何より驚きなのが……複数姦や物の大きさとかで堕ちちゃうっていうか、それで快樂の全てを知ったみたいになるのが……ええっ！？ ってなっちゃうなあ、わたし」

「うん、そうだね？ 少しあれな話するけど……例えば尿道開発するとか子宮脱させて開発調教、脱糞等ス力要素、他全ての性的器官を徹底的に舐けるなら分かるけどね……」

「せめてアル拡張しすぎてプラグ常時挿入状態じゃないと脱腸するってくらいしないとだよなっ」

「後は薬を用いてのNTR……往々にしてニフヤポンプが多いけど」

「チヨコさんっ！ あんまりそう言う話題はよくないよっ！」

「でも一応はね？ 例えばコカ ンにしても他様々なドラッグにしても非現実的過ぎてね……まあ創作な訳だから何でもありっちゃありだけど、そんなに吸引させまくったらいつか鼻腔が爛れるよ？」

とか、陰部に直接打つ必要はないのに、とか……ね？」

「アングラな話題はあんまよくないけど……リアリティ持たせるつもりで描くならせめて徹底してほしいって言う思いはわたしも同意かなあ。基本アップでダウンしないし自殺衝動、幻覚、他精神異常も何もない場合があるし、過度の摂取してるわりにODしてるのこれ？ って思う時大量にあるし……取り敢えず粉出したり注射器出せばいいと思ってちゃだめだよなあ」

「NTR物は完全なる説得力持たせないかね？ 世の中いろんな趣味の人が居て何をどう思うのか分かった物じゃないからね」

「まあそれはさておき……誘い受けですけどね、チョコさんっ」

「はいはい？」

「これは部類的には肉食なの？」

「うーん……そうとも言えるし、草食とも言えるかなあ？」

「ほうほう、それはまたなぜなにゆえっ？」

「そもそも誘い受けの定義は襲わせる事に由来するから、そうなると自分から襲う事は一切しないの」

「え、襲わないのっ？」

「うん、襲つたらもう破綻するでしょ？ でも性的欲求や求愛願望があるの。それをどうにかする為に 相手を誘惑して襲つように仕向けるの」

「おおっ、それって凄い策士だねっ」

「でも見方を変えればヘタレにも見えるでしょ？」

「むむっ……確かにそうかもっ。自分から襲う勇気がないようにも見えるっ」

「そこは作者のさじ加減、あとは状況や相手の性格、そしてヒロインの性格なんかも含めて判断は変化するけど……それでも共通するのは相手に全てを委ねること。こればかりは草食系に含めても良いかなあ？」

「でも誘い受けを純粹に楽しんでそんな淫乱っ子ちゃんも悪くないねっ」

「そうだね、それはそれで可愛らしいね？ 上手くいかないと拗ねたり、最悪は豹変して徹底的に喰らい尽すのも悪くないね？」

「でも、何でこれは同性愛で流行ったんだろう？」

「それはやっぱり 受け、そして攻めの属性が前提にあるからだね？」

「ふむう？」

「ようは役割があるでしょ？ 男女間ではどっちが攻めでどっちが受けなんて性別で決まってる事だから考えるまでもないけど、じゃあ同性だとどうなるってなったら それこそ人物の性格や状況によるでしょ？」

「ふむ、確かに……」

「で、誘い受けはそう言ったネコたち……特にネコにとっての新たな属性かな？」

「つまり、新境地？」

「そうだね、新たなスタイルだね？ 受けだってただ受けてる訳じゃない、襲われる事を待ってるエッチちゃんだっているんだっ、そこが萌えなんだっ、と言う感じで確立されてきたんじゃない？ 一つの見せ場だね？」

「なるほど……同性愛だからこそに映える技法かあ……」

「そして惑わされる相手が苦悩する場面も萌えポイントだね？」

「ふむう、中々に奥が深いけど……実際はどんな感じかを検証考察妄想してみるでござるっ！」

『ねえ、ケーキちゃん……？』

『なっ、なにっ……』

『どっつして顔背けてるの？』

『だっ、だつてっ……………』

『あはっ……………もしかして、ブラウスが透けてるのが気になるの?』

『っ……………早く着替えなよっ』

『ごめんねえ、雨宿りのついでに寄っただけなんだけど……………ん、お洋服借りるね?』

『う、うん……………』

『ん、よいしょっ……………』

『ううっ……………(布の擦れる音が生々しいようっ……………それに、何だか雨に濡れたせいかチヨコちゃんの甘い香りがするっ……………)(』

『あっ……………ねえ、ケーキちゃん?』

『えっ、なに　　ってうわあっ!?!?』

『これ、サイズがあわないよ……………?』

『わっ、わわっ、なんで前肌蹴てるのっ、おっぱいが見えちゃっよっ、ていうか下着は　　』

『んっ……………邪魔だからとっちやった』

『ちよっ、何で寄りかかるのっ』

『だつて雨に濡れて寒くて……………』

『っ……………おっ、お風呂入ってくれば　　』

『　　ねえ、何でそんなに目を背けるの?』

『だっ、てっ……………』

『……………ねえ、寒いよ、ケーキちゃん』

『っ……………(触れてるっ……………チヨコちゃんの感触がするっ……………)(』

『このままにするの……………? 私、風邪ひちいやっよ……………』

『っ……………はあっ、はあっ……………!』

『……………ねえ。　　ケーキちゃん……………温めてよ』

『っ　　!』

『きゃっ』

『わっ、わたしは悪くないんだっ……………チヨコちゃんがっ、チヨコちゃんが無心に迫るからっ……………!』

『ぶぶっ……………言い訳?　　ねえ、どうするの?　　私を押し倒して……………』

食べちゃっのっ」

『っ 温めてっ、あげるっ……!!』

『あっ 』

「……すごい艶めかしいやり取りだあっ!!」

「やっぱり淫乱な子も悪くないと思えるね？」

「こっ言うつのは小悪魔系とも呼べるのかなあ？」

「んー、そうだね、そう言う呼び方もありかな？ しかしあざとい設定だねこれも……」

「うーん、雨の中、友だちの家に駆けこんできた設定なんだけど、どっ？」

「ある意味は王道だね？ こっ言う展開も少なくないからねえ」

「でも、誘い受けは実際にやられたら……わたしも抗えないかもな

あー……」

「なに？ それはしろってフリ？」

「えっ？ いやいやっ、そんなんじゃないっすよっ？」

「ふふっ、そうっ？」

「そうそうっ。だってチヨコさんっていつも 「

「……？ いつも、なに？」

「い、いやあ、ほら……」

「？ 不思議なケーキちゃん……」

(言えないよねえ……所作の一つ一つから言動から何まで、まるで誘い受けてるようだよ、だなんて……)

こっして夜は更けていく。



## 8 主従系百合について

とある夜の風景。

「ペットが欲しいなあ……」

「ペット？」

「うんー……なんか犬とか猫とかいいなあって思っ」

「ふふっ、もしかして何かの番組に影響されたの？」

「ぎくっ。い、いやね？ ほら、やっぱり動物って最高の癒しでしょう？」

「んー、確かにそうだね？」

「そう言った動物たちと日々触れ合えたらどれだけ幸せなんだろうなーとか思った訳でしょ？ そんな、決して何かに影響された訳ではないですよっ？」

「何故かそこは頑なだね？ まあ切っ掛けはまた別にしても、確かに動物って凄まじい勢いの癒しオーラを纏ってるねえ」

「でしょでしょっ？」

「でも結構お世話とか大変なんだよ？」

「あれ、経験者？」

「と言っか今も飼ってるよ？」

「えっ。本当っ？ なになにつ、何飼ってるのっ？」

「トカゲ」

「……え？」

「だから、トカゲだよ？」

「……まさかのレプタイルっ!？」

「これも近年では受け入れられつつあるジャンルなんだけどね？でも未だにマイナーな部類だよねえ……少し悲しいかなあ。世話

はすごく楽なんだけどね、犬猫に比べれば」

「いやいやいや、トカゲ飼ってる人なんて見たことないよっ」

「そう？ 結構いるんだよ？ 私の周りでも数人いたよ？」

「まさか流行ってるのっ!？」

「どうかなあ？ 単にもともと好きだった、とかじゃない？ 私も

そうだし」

「うーん、趣味は好き好きとは言っけどお……流石に爬虫類はなあ

……」

「飼育は楽なんだけどね？ 一カ月ご飯あげなくても気合いで生きるよ？」

「なにさせてるのっ!？」

「ふふっ、私はしてないよ？ 爬虫類ってすごく強いから……寿命も十年から二十年は生きるし」

「……えええっ、それ本当っ!？」

「勿論種類にもよるけどね？」

「ち、ちなみに何て言うトカゲを飼ってるの……?？」

「今はバナスパイニーテールイグアナが一匹と、グリーンイグアナが一匹と、ナイルモニターが一匹かなあ」

「何が何だかわからないっ！ あっ、でもバナナって言うのはおいしそうっ!」

「うちのバナスパはまんまオムレツ体型だから多分美味しいと思うよ？ 爬虫類って鶏肉と変わらないから」

「食べたことあるのっ!？」

「最近結構ワニ肉出してくれる飲食店あるよ？ そこで食べたの」

「ほへー……なんだかチョコさんって独特だよねえ」

「そうかなあ……」

「でもでもっ、そう言う愛でる気持ちってとても大切だよっ」

「まあ、自分が欲しくて購入して躡けてるわけだから当然なんだけどね?？」

「けどその当然こそが主として持つべき愛情なのですよっ」

「あれ、この流れはもしかして……」  
「あぁっ、やっぱり欲しいよねっ、そう言っ愛すべき僕<sup>オレ</sup>はっ、そう言った関係っ」

・主従系百合について

「主従関係において発生する素晴らしい恋情愛情はっ！」

「これまたドロドロしそうな話題だね？」

「そうですね。このケーキちゃんさんはですねっ」

「ちゃん？」

「さんっ」

「うん、ケーキちゃんは？」

「そりゃもうドロドロしたお話大好きなですよっ！特に愛憎入り乱れる感じのお話ねっ！」

「そう言えばそう言ってたね？」

「勿論純愛やらも大好きだよ？でもでも……可愛さ余って憎さ百倍<sup>ハズレ</sup>ってなるくらいに濃い内容が好きなのだっ！」

「愛憎は紙一重とはよく言った物だよねえ。確かにその通り……愛情ってそのまま同程度の憎しみに変わっちゃうからね。分かり易くいえば嫉妬心がそれだね？他は裏切られた時に抱く殺意は愛情のまんま裏返しだしね？」

「このバランスってどうか平衡感覚がちよー大事っ。壊れそう<sup>クレーク</sup>で壊れない、あぁっ、でも時に嫉妬やらで暴走して無理矢理組伏せたりとかね……最高だよねっ！」

「ケーキちゃんも中々通と言っか、独特な感性持ってるよねえ……でも、主従は何もドロドロだけじゃないと思うけど……」

「それはもちのロンっすよっ。主従関係って言っのはそもそも尊重の意思がある訳で、下僕は主人に対して絶対的な忠誠を誓っのが往々なのでよっ」

「うん、確かにそうだね？」

「何時如何なる時であろうともご主人様を優先する……例え己の身に何があるうとも、状況によっては不利な何かを与えられることになろうともそれすら鑑みないっ。そう言う精神は正に従者の鑑っ」  
「中々に燃えてるね、ケーキちゃん？」

「だがあつ！ 主従関係の最高の威力はそんな尊重遵守により生まれる訳ではないのだっ！」

「うんうん」

「それはすばり 愛憎の箍が外れた時に見せる豹変ですね……！」

「豹変かあ」

「特にね？ 下僕の立場の方がジゴロだったりするとさ？ やっぱ色々恋心寄せられる訳じゃないですか？」

「つまり、あれかな、不用意にフラグを立てるタイプのことかな？」

「そうそうっ。 そんな下僕の主人がそれに対して苛立ちを募らせて、ある日何げない言葉や行動がスイッチになって 教育に走る訳ですよ」

「教育……うん、そうだね、これがとても重要だね？ 主従関係で

あるからこそ分からせる必要がある。 手綱を握り、首輪を締める

のは何時だつて主人の役目だからねえ」

「ここで最重要となるのがそこに至るまでのプロセスですよ」

「ふんふん、過程だね？」

「そうそう。 王道な感じで言えば……親に用意された下僕、ないし従僕と日々を過ごす、過ごすうちに心惹かれるようになる、それが恋心だと自覚しはじめ くらいの時に横からちよっかい出されると良い具合だよええ」

「或いは既に愛を交わす関係になってるぐらいでも可だね。 上の立場である事を利用して徹底的に躡ける……愛故に躡けるけど憎しみ故に悶えさせ苦しめてしまう……プライスレスだねえ」

「決して暴力任せに憎しみをぶつける訳じゃないんだよね。 そこら変のさじ加減は製作者側によるけど、わたしとしては主人が下僕を無理矢理ベッドに組伏せて、血が滲むくらいに首筋を噛む……く

「らいがベストっ！」  
「中々に生々しい表現だね？ 今日のこれは大丈夫かな？」  
「大丈夫だよっ……多分」  
「今日も結構メタいねえ？」  
「それも今に始まった事じゃないさっ！ と言う訳でっ、今宵もいっつちよ検証考察妄想タイムだぁーっ！」

『誰があの子と喋って良いって言ったのよ、ケーキっ……！』  
『あっ、やだっ あううっ、チヨコさまあっ……！』  
『ケーキは私のものでしょっ……なのになんで別の人に笑顔を向けるのっ……！』  
『そんなっ、違っ……だっってあの子は友だちでっ……！』  
『っ……なによ、友だち、友だちっ……私はあなたの主人よっ、マスターなのよっ、私だけを見なさいよっ……！』  
『やあっ、いたいよっ、やめてよチヨコさまあっ……！ 腕放してっ……！』  
『許さない……徹底的に分からせてあげる。 教育が必要なよ、ケーキ……あなたが悪いんだからっ……』  
『なにっ……なにする気なのっ！ やめてよっ、やだよっ、そんなの入んなっ いうあああうっ……！』  
『っ……ふうっ、はあっ……痛い、ケーキ……？ そんなに泣いてっ……』  
『ひぐっ……あううっ……ごめんなさいっ、ごめんなさいごめんなさいっ……もう許してえっ……！』  
『ダメよ……許さない。 私以外を見れないようにしてあげる。 あなたを……壊す。 それはマスターである私にだけ許された特権』

なんだから 』

「 たつつつまんねえっ！ うへへっ、うへえっ……………！」

「これはこれで凄い濃いねえ……………主従、に足す事のメンヘラ、に足す事の肉食かな？」

「往々にして主人側ってそう言う感じだよ。特に一度でも籬外れたら歯止め利かなくなつて突つ走るもんじゃない？」

「まあ確かにこれも王道な感じだけど……………これは主従だからこそに映える、と言つてもいいかもね？」

「説得力が増すからねえ。たとえば先輩後輩とかの年齢差、他、ノーマルカップリングでもこう言う展開は当然あるけど……………やっぱり逆らえない立場、躡ける立場が確立されると画だけで納得できるよねっ」

「設定、背景が生み出す物……………やっぱり初期の段階って凄く重要だよな。そこからキャラクタを作っていくと大体テンプレになつちやうけど……………」

「けど王道は素晴らしいと思いますっ」

「ある意味では外すことの出来ない答えだからね？」

「後はやっぱり百合だと尚更燃えるよね。力も歳も同程度の少女を同じ少女である主人側が一方的に攻め立てるって言う光景……………凄く嗜虐心を煽るよねえ」

「……………もしかしてケーキちゃんってサドなの？」

「んうえ？ そんなことないと思うけど……………どうだろうねえ？」

「うーん……………あ、そうだ、良い方法があるよ？」

「？ 何かな？」

「はい、お手っ」

「わんっ!」

「ふふっ、偉い偉いっ」

「わふうっ……」

(……この従順っぷりはやっぱりマゾかなあ？ 犬っぽいもんなあ、  
ケーキちゃん……まあそこが可愛いんだけどね?)

こうして夜は更けていく。

## 9 純愛系百合について

とある夜の風景。

「リア充爆発しろっ！」  
「……なんだか今日は荒れてるね？」  
「ううっ……聞いてよチヨコさーんっ！ 今日ねっ、今日ねっ」  
「はいはい、何があつたの？」  
「駅前でねっ、なんか高校生くらいのカップルがねっ、人目も憚らずにイチャコラしてたのーっ！」  
「ああ……まあ若気の至りだねえ。歳とってから思い返すと死にたくなる時がくるよ？」  
「そうだとしてもむかつくんだけだあーっ！ 何だよ何だよ見せつけやがってっ、あてつけかコノヤローっ！」  
「どっどっ、落ち着いて、ね？」  
「むふーっ、んふーっ……！」  
「全然落ち着く様子がないね？」  
「だってムカつくじゃんよっ、ぼくたち今幸せの絶頂なんですうっ、って感じのあの態度っ！」  
「そこは祝福してあげよう？」  
「やだいやだいつ、他人の幸福なんて見たくもないやいつ！」  
「大分荒んでるねえ……ほら、ケーキちゃんの為のケーキあげるから落ち着いて？」  
「わーいつ！ ケーキのケーキだあっ！」  
「ふふっ、相変わらず甘味には弱いね？」  
「あむあむっ……むふうっ……チヨコさんの作るスイーツは何時食べても最高においしいねえ……」

「ん、ありがとうね？」

「ふいー……まあ少しは落ち着いたけどお……けどなんなのかな、  
一々往来でちゅっちゅしたりするアベック共は？」

「表現が古いよ、ケーキちゃん？　んー、そうだね……それこそ優  
越感を得ようとするか、或いはそう言う趣味なんじゃないかな？」  
「趣味？」

「うん。見られて興奮するとか、注目を浴びるのが快感だ、とか」  
「へっ、変態だあーっ！」

「けどそう言う人たちも少なからずいるからね？　世の中には色々  
な性癖を持つ人たちがいるからねえ」

「だとしても人を不快にさせるのはいけないと思いますっ」

「そうだね、それが至極当然な意見だね。節度を保ち常識を守  
るのが当たり前だけど……けど、そう言う柵を乗り越えること自体  
が快感の一つだろうしねえ」

「日本にはHENTAIしかいないのっ！？」

「そう言う訳じゃないけど、そう言う人たちもいるって話ね？」

「あ、そっか、そうだったねー」

「とは言え……人前でイチャコラできるのは本当に若いうちくらい  
だよ？　後は酷く酩酊してる時くらいかなあ？」

「ああ、時々見かけるね、酔っぱらってなんかすっごいぶちゅぶち  
ゆしたりしてるカップルさんたち。あれはなんか見てて心配にな  
っちゃうなあ」

「下手してホームに落ちたりしたら、とか考えちゃうよね。おま  
けに吐瀉物撒き散らしたりするからもう目も当てられないよね」

「前に吐瀉物撒き散らしてその上で寝てるOLさんを見たことがあ  
るなあ……」

「何それ凄いな？」

「うん、本当に凄いなと思った。熟睡してたけど起きた時に死ぬほ  
ど恥ずかしい思いしただろうなあ……」

「まあ大人は大人でそういう時……お酒を飲んで初めて本能煩惱解

放できたりするから仕方ないね?」

「それに対しての若さってのは凄いいよねっ……恥も糞もないもんねっ!」

「どうどう、また荒れてきたよ?」

「むむっ、むううーっ……よしっ、ある程度落ち着きましたっ」

「うん、えらいえらい」

「まあ、とは言え……その時その瞬間が全てなのが若さだとしても、人に見せつけるようにしても……それも愛だと言えば愛なのかなあ?」

「当人達がそれで良いと思ってるならそれが最上の愛の形なんだと思っよ?」

「他人がどうこう言う事じゃないのかなあー……けどわたしは口をすっぱくして言うねっ!」

「ん、何を?」

「それはですよっ、愛を語るならっ、真実の愛のなんたるかを言うのであればっ」

・純愛系百合について

「純愛の全てを語ると言っつのであればせめて涙を用意しろっつねえーっ!」

「あ、ついにこのジャンル……と言っつか全ての帰結するべき答えを語るんだね?」

「最早語るに及ばずっ、純愛とは読んで字の如くに純然たる愛を言うのですよっ」

「古来から現代まで……多くの趣味嗜好があれど、誰もが憧れ誰もが夢見るラブストーリーって確実に純愛だよねえ」

「しかし昨今の人類の求めるものは千差万別……いや億差兆別っ。

やはりNTRと言うジャンルが確立されたように、世は正に大混沌時代っ!」

「奪い奪われる、或いは失う事で得る虚無感や喪失感……それが快感だつて言う人がいるのもまあ分かるけど、それでも純愛には敵わないかなあ」

「あ、そう言えばチヨコさんって純愛趣味だったっけ？」

「そうだよ？　純愛こそが至高にして究極完全なる愛の形だと思ってるね？」

「わたしは基本ドロドロしてれば何でもいけるけどあ……純愛ってつまりは王道の全てを言うの？」

「うーん、そうと云ってもいいね？　簡単に言うならラブロマンスって必ず障害があったりライバルがいるでしょ？」

「うんうん」

「そう言うのを乗り越えて、恋する人と結ばれるためにひたむきに努力したりする……それが純愛だと思うな」

「あれ、でも両想いが成立してないと愛の関係って呼べないんじゃないか……」

「ううん、それは二の次だよ？」

「えっ。　両想いは不要っ!?!」

「うん、極論言っちゃえば相手の気持ちはストーリーの種であつて目的じゃないんだよ？　目的はヒーロー、或いはヒロインが愛を成就させることだからね。　寧ろ最初から両想いと何その又ルゲー？　ってなっちゃうかなあ？」

「これはまた昨今の流れに逆らうような台詞だねえ……」

「本当、今時の流行りってすごいよね。　全て都合の良いストーリーや展開ばかりで……先がすぐ読めるから開始五分で飽きるとか結構あるよ？」

「まあニーズがあるから仕方ないよ。　とは言え……確かに純愛物って意外と確執な仲からのスタートとか多いかも……？」

「勿論端から両想いとかラブラブしてるのもあるし、必ずしも攻略していくような形が純愛であるとは限らないけど　燃えるか燃えないか……そして萌えるか萌えないかは初っ端の関係性で決まると

言っても過言じゃないねっ」

「おおっ、なんか力説してるっ」

「例えば確執な仲からのスタートだと、何かしらの問題、あるいは障害が発生して、何とか主人公と協力してそれを解決する。その後には互いは意識しはじめたりするよね。その心情の変化とか葛藤、或いは悶えたり自身に驚いてる姿がいいよねえ……」

「ふうむ……確かに、いがみ合ってる状態だったのに、ふと相手が可愛いと気付くと……こう、モヤモヤすると言うか、えっ、どうしちゃったのさわたしっ、てなるね？」

「そこが萌えポイントの一つだね？　つまりラブストーリーってヒーロマンドラマそのままなんだよ。相手の感情、そして主人公の感情があって初めて成り立つし、それを蔑ろにしたらストーリーは破綻して読めたものじゃなくなるね？」

「更には背景や状況からの影響もあるから正しくドラマな訳かあ……統合すると、もしかして一番多くの要素をぶち込めるジャンルなんじゃ……？」

「その通りっ。故に多くの属性のヒロインがいたりするし、ハーレムもあればヤンデレもあるし肉食も当然いればペットにせんが為にと躍起になる子も姿を見せる訳なのっ」

「成程お……分かったっ。つまり純愛系って言うのは　物語萌えなんだねっ！？」

「そう、その通りっ。これまでは属性、他、ジャンル等々に対する物だったけど、今回はストーリー……つまりは根本にして根底にある絶対的な要素に対する見解だね？」

「いくら可愛いキャラを出そうが魅力あふれるヒロインを出そうがストーリーが粗末じゃ萌えられる物も萌えられないし燃えられないってことだねえ」

「でね、これはどのジャンルにも言える事は確かだけど　こと、同性愛のジャンルに関しては最重要だよ。とても重要だよ。だつて取り扱うジャンルが同性愛……つまりは異色の恋愛なんだも

ん。ここ適当にされてごらん？ 見れた物じゃないよ？ ただのキヤラ萌えとかそんなのになるよ？」

「それは……嫌だねえ。世間的に認められない気持ちを抱いて、それでもそれを成就せんが為にと躍起になる……それに説得力を持たせて納得させるだけの物がなくちゃ何のために同性愛を選んだのか謎になるね……」

「そう考えると少女セクトしかリストロベリー・パニックしかり……本当にすっかりしてたねえ。結婚できないけど同棲して、しかも子供欲しいね、つくれたらいいね、とか言っちゃうからもうね、はううっ！ ってなっちゃうよね、こっちはね。切なくて可愛らしくてもうねっ！」

「ふむふむう……純愛と名の付く物は適当では許されない、それに伴うだけの屋台骨を用意しなければならぬ……基本なことなのに忘れがちだねっ」

「そうだね？ ある意味では初心だけど 初心は忘れないようにしたいよねっ。 そんな感じで検証考察妄想してみよう？」

『……好きなの、ケーキちゃん』  
『チヨコ……』

『分かってる……結婚だつてできないし、赤ちゃんだつて……できないけど、でもそれでもっ』

『……両親になんて言うの？ 好きな人が女の子だつたつて……それで納得してもらえと思うの？』

『思わないよっ。けど……自分の気持ちに嘘はつけないよっ』

『将来性なんてないよ？ だれにも言えない関係なんだよ？』

『分かってる』

『友達にだって言えないんだよ……世間に知られたらどう思われるかなんて』

『だから分かってるもんっ』

『チヨコ……』

『だって好きになっただから仕方ないじゃないっ……どうにかしてでも、どうあってもあなたの傍に居たいっ……』

『っ……』

『間違っってもいいよ、誰にも認められなくていいっ。私はっ、私はあなたと一緒にいられるなら何もいらないよっ！』

『……ばかっ』

『えっ』

『バカバカっ。人の気も知らないでそんな事言っ……我慢してたんだよっ、言わないように、この気持ちを伝えないように我慢してたのに、チヨコのバカっ……』

『……ケーキちゃんっ……』

『……好きだよ、チヨコ。ずっとずっと……好きだった』

『っ』

『……例え誰に認められない事だとしても……わたしは構わない』

『ケーキちゃんっ……！』

『好きだって言ってくれてありがとう。わたしも……わたしも大好きだよ、チヨコ。ずっと一緒に居よう。誰かに否定されたっ……もう、平気だよ。チヨコを馬鹿にする奴はわたしが殴ってやる。チヨコはわたしが護る。だから……任せて』

『ううっ、うええっ……ケーキちゃんっ！』

『……何これ泣けるうっ！』

「これが純愛……葛藤の末に答えを得た者達の全てだね？」  
「許されざることだとしても、それでも尚と諦めを踏破し愛する人と共に生きる事を選ぶ……素敵いっ！」  
「同性愛の場合はこれが本当に重要だからね。別にそこは曖昧でもいいけど、何かしらのイベントが発生したらそれに伴うように掘り下げたり要素を用意しないとね？」  
「ストーリーって大事なんだねえ……」  
「それと勢いも欲しいかな？ 理屈を吹っ飛ばしちゃうくらいの。たとえば理不尽や道理があつて、それをどうにか出来ない時は勢いで納得させちゃえばいいからね」  
「何そのごり押しっ！？」  
「ふふっ、時には押しは強くないかね？」  
「そんな恋愛じゃないんだから……はっ、もしかして今の今日のオチっ！？」  
「どうかなあ？」

こうして夜は

「ダメダメっ、納得いかないからっ！」  
「凄くメタいねえ……でもどうやってオチつけるつもりなの？」  
「それはっ……」  
「それは？」  
「……ねえ、チヨコさん？」  
「……なあに？」  
「少し……ううん。改めて言いたい事があるの」  
「……それは、どういっうお話なの？」  
「それはね」

……こうして夜は更けていく。



とある夜の風景。

「……………えへへっ」

「ん？ なぁに？」

「うえっへへっ……………いやあ、そのうっ……………」

「もうっ……………何がそんなに面白いの？」

「いやいやっ、別に面白いかかじゃなくってねっ？ ころっ、幸せだなあーって思っつてっ」

「ふふっ、大袈裟じゃない？」

「けどまあ、ね？」

「……………ん、そうだね？」

「はあー……………リア充も悪くないもんですなあーっ！」

「やっぱり大袈裟だね？」

「けどまあ仕方ないよっ。 うんうんっ」

「何それ？ 変なケーキちゃん……………よいしょっと。 はい、レディーキラー」

「ういー……………うーん、やっぱりこのお酒は甘くて美味しいねっ」

「ミルクティみたいで美味しいとは思っけど、飲み過ぎるとすぐ酔っっちゃうよ？」

「ん、そこらへんは大丈夫っ」

「本当かなあ？」

「本当本当っ。 しかし美人さんを見ながらだとお酒が進むのは当然な訳でしょね？」

「それはバーボンとかを飲みながら言っつて欲しい台詞だなあ」

「ぐぬっ……………お子様舌ですみませんっ……………」

「けどそう言う所も可愛いと思うよ?」

「んにゃっ」

「ん?」

「……不意打ちは卑怯だよっ」

「んー……ふふっ。ごめんね?」

「くっそうっ……やはり年上の余裕ってやつかあっ……!」

「んー、どうかなあ? 私もケーキちゃんに酔わされてるのかもね?」

「えっ、それ本当っ?」

「さてどうでしょう?」

「くっ、やっぱりチョコさんの方が一枚も二枚も上手かっ……!」

「こればかりは人生経験もあるからね?」

「はあ、わたしもそのくらいの余裕がほしい……んむっ、おかわり  
ーっ」

「はいはい。次は何飲む?」

「んー、どうしよっかなあ? なんだか最近、こっ……同じような  
物ばかり頼んでる気がするしい……」

「時には冒険も必要だけど、自分の得意な物を楽しむのも悪くない  
よ?」

「けどけどっ、最近はお酒の何たるかもよく分かってきた訳だし、  
ここは色々とチャレンジしてみたいのですよっ」

「ふむう、それは良い心がけかも知れないね?」

「そうっ、世界には多くのお酒があるように、同じジャンル内でも  
系統は多く存在するっ。 故に冒険心を捨てずに新たなる道を開く  
べく」

・T S系百合について

「性転換しちゃったりするお話を楽しむのもいいじゃないのよ  
なっー」

「すつごく強引なつなぎ方だったね？」

「今更だよそれはっ、気にしたら負けですっ！」

「そうかなあ？　けど、うーん……ついにこの系統のお話をする時が来たんだねえ」

「これはもう、賛否両論はつきりくつきり分かれるからねえ……」

「T.S……トランスセクシャルだね。言葉の通りに性転換する訳だけど、これはやっぱり難しいお話になるねえ」

「T.Sは基本同性愛物では頻繁……って訳じゃないけど、ここ最近では多く見られるようになってきたね」

「……同性愛？」

「ぎくっ」

「……ねえ、ケーキちゃん。やっぱりここはハッキリさせないといけないと思うんだよね」

「言わんとしてる事は分かるっ、分かるんだよチヨコさんっ、でもでもおっ！」

「しかし私は言うね？　性転換したものって　それ同性愛って言えるのかなあ？」

「　ぐわあーっ！　一気に核心をついたあーっ！」

「とは言っても多くの人々がこれに首を傾げてるのも事実だよね？　肉体的な性転換がある故に見た目では同性愛と呼べるけど　でも心や精神は前の性別を引きずってるから、それは同性愛とは呼べないんじゃない？　って意見も多々あるよね」

「中には心や精神までもが異性化する、或いは徐々に精神が変化後の性別に適応する、ないしは傾倒するってのもあるけどお………それでもT.S物は同性愛と呼べるか否かって言うのは難しいお話だよ、チヨコさん……」

「見たままに美女と美女が戯れてたらそれは百合だけど　実は片方の中身は男です、って言われたらなんじゃそりゃってなるよねえ」  
「けど陰茎がなければそれは生物学上では雌になるわけだし……」

……」

「でも精神的には内面意識が性別に不一致や違和を感じたら一言に男、あるいは女とは呼べないらしいよ？」

「……複雑だあーっ！」

「こればかりは問題を挙げれば限がないよ？ 兎角、結果として異性化してしまった、と言う事実を目の情報から得て理解して初めてTS物って読めるのかもね？」

「TSの醍醐味と言えば、やっぱり性の違和感だよねえ。ある日突然女になった、男になった、ってなるわけだけど……最初は戸惑うのがテンプレだねえ」

「肉体的変化に驚いて、そして現実を受け入れて絶望して……その後性に適応する生き方を選ぶか、或いは元の性別に戻る為に躍起になるか、もしくは性別関係なしに元のままに振舞うか、と様々なパターンはあるね？」

「そして往々にして恋愛へと発展するけど……断言できるのは、同性愛を題材にした作品におけるTSは純粋な同性愛ではないのは確かだよねえ」

「こればかりは仕方がないね？ けど女体化して戸惑う元男性が男の意識のままに女性に惚れてしまうって言うのは結構理由付けとしては納得しやすいよね？」

「そこは有利だよ。だってもともと異性な訳だからねえ」

「そしてその後の葛藤が最も足る萌えポイントなんじゃないかな？」

「性の不一致に悩みつつも恋心に嘘は吐けない、けど同性じゃ何かと不利……とかなるけど結局は相手も同性愛者だったりするよねえ」

「そこは御都合と呼ばれても仕方ないけど……けど、例えばもともと百合趣味の女の子がある日突然に男になったら、これは色々とお得かもね？」

「んにゃ？ なんで？」

「だって精神は女のままだけど肉体は男なんだよ？ それって最強の武器を手にした状態だし、世間的には何の問題もないじゃない？」

「あ……あぁっ、成程っ、確かにそうだっ！ これって百合でもヤ

オイでも言えるけど、TSってそう言う救済処置にも成り得るんだ  
っ！」  
「けどまあ、往々にしてTSの神髄は変化後の自身にどう適応して  
いくか、がミソだと思うよ？」  
「そして同性になっても恋を実らせるためにどうアクションをとる  
か……そこを検証考察妄想してみるでござるっ」

『ちよっ、バカやめろっ、オレは男なんだぞっ』

『ええ？ けど今は女の子でしょ、ケーキ？』

『そっ、そうは言うけどっ わーっ、バカバカ近いつてばっ！

胸っ、胸見えてるぞっ！』

『うるさいなあ……一々同性の目なんて気にしてどうすんのよ、ア  
ホらしい』

『っ……こいつ、人の気も知らないでっ……』

『？ 何か言った？』

『無防備にも程があるって言ったんだよっ』

『あはっ。 誰に襲われるってのよ？ 今あんたしか傍に居ないの  
に』

『……そりゃあ、オレが襲うかもしれねえだろ』

『だから今のあなたは女の子じゃないの。 こおんなちんちくりん  
な少女姿したケーキなんて怖くもなんともないよーっだ』

『っ……このっ……！』

『きゃっ……！』

『とか何とか言って、女らしい声あげるよなあ、チヨコも。 どう  
だ、小さな少女に押し倒された感想は？』

『ぬぐぐっ……！ むかつくうっ……！』

『これに懲りたら反省しろ、バカ(……同性だところも気軽に触れられるんだな。 けど、やっぱりオレは、元の姿でお前と ( )』

「少しばっかりテイストを変えてみたけど……うーん、見た目は少女達の戯れでも、やっぱり精神が絡むとどうも違和感あるねえ」

「それもあるけど、情報が多いのもあるかな。 キャラクタの個性をもう少し削ればいいんじゃないかな？ 男っぽくし過ぎてるんだよ」

「けどけど、折角のTSだし、やっぱり意外性がなきゃダメだと思うんだあ。 えっ、なんでこんな野蛮人が超美少女につ、つてくらののね？」

「なんだか何処ぞの魔王様みたいな感じだね？」

「メタイよチヨコさんっ！」

「まあ、こればかりはさじ加減、そして好みの問題だから何とも言い難いかな？」

「しかし未だにTS論争は様々な場所で行われているのが実情なのですよ、チヨコさん」

「うーん……何を以ってして同性愛とするか……肉体、そして精神の二つが完全に一つの性別に支配されてなきゃ……納得はされないのかもねえ」

「ここの所はTSもかなり注目されてきてるけど、もしかしたら同性愛とはまた別にTS愛って言う恋愛枠が生まれるかもっ」

「あ、それはもしかしたらかなりいい案かもね？ 同性愛ではない、これがTS愛なのだ、って確立しちゃえば誰も文句言えないし、ああ、そうなんだって納得するしかないしね？」

「ある意味ではニュートラル属性かあ。 男女どっちもイけるって

言つとかなりの語弊がありそうだけどお……TSには無限の可能性が秘められてるねっ」

「……ちなみに、ケーキちゃんは私が女でよかったと思ってる？」

「ふえっ!?! なっ、急になにをっ……………」

「……………」

「……訊くまでもないでしょっ、ばかっ……………」

「ふふっ、ありがとうね？」

「むうーっ……………」

「はいはい。あんまり飲み過ぎちゃだめだよ？」

「別にいいもーんっ。どうせ今日はお泊りだしっ」

「……………」

こうして夜は更けていく。

## 11 おねロリ系百合について

とある夜の風景。

「子供っていいよねえ……」

「また唐突な話題だね、ケーキちゃん？」

「いやさ、若さって本当に素晴らしいと思うんだ」

「若さかあ……確かに羨ましいと思う時はあるね？」

「でしょ？ 何をするにも活力にあふれてるし、いつだってチャレンジ精神あるし、何より純真無垢でピュアッピュアだし……」

「経験がないけど、その分何をするにも新鮮で楽しめるって言うのは得だねえ」

「そうなんだよねえ……ねえ、知ってる、チョコさん？」

「ん？ 何が？」

「人の一生ってね、生まれてから二十歳までと、二十歳から死ぬまでの体感時間って同じ程度なんだってさ」

「へえー……つまり、それだけ若い時分は濃密な日々ばかりって訳なんだ？」

「そうなんだと思うよー。でも本当、学生終えてからの一日一日って早く過ぎるよねえ」

「確かにそう思えるけど……ケーキちゃん、まだ二十四歳じゃない。老けたこと言ってるって本当に老けるよ？」

「うぐっ……でもなあんか刺激が足りないのですよっ」

「……毎日刺激的なことしてる気がするけど？」

「そっ、それは言わなくていいよっ、もうっ！」

「ふふっ、ごめんごめん。けど確かに若い頃と比べたら新鮮味だったり刺激的な物との出会いは少なくなっただと言えるかもね？」

「それもこれも経験を積んで多くの事柄を知るからなんだよね。それは分かっているけど……やっぱりあの頃のような感覚がほすいよー……」

「二度と手に入らない時、か……人って過ぎ去って初めて後悔するけど、それが戒めにもなるから失敗したり恥をかくことって悪い事ばかりじゃないよね」

「そんな人生の云々じゃなくってさっ」

「もうっ、少しいいこと言ったのにな」

「うん、確かにいいこと言ったけど……チヨコさんだってまた若い頃に戻れたらー、とか考えたりするでしょっ？」

「……それってもしかして遠まわしに私をおばさん呼ばわりしてる？」

「違うよ違うよっ！ そんな訳ないでしょっ！」

「いつとくけどね？ 私はまだ二十六歳だからね？ 若いんだよ？」

「わかってるよおーっ、十分見た目だって若いし綺麗だよっ……からだも」

「……なんか聞きたくない台詞が聞こえた気がするけどまあおいとくね。兎角……まあ、若い頃に戻れたらなあとは思っよ」

「それはやっぱり青春をもう一度謳歌したいから？」

「が、一番だと思っなあ。だって何をしてもどんな馬鹿げたことやっても楽しかったし、景色はいつだってキラッキラしてたし、絶頂の時代ってそう言う時代を言っと思っんだ」

「……なんとなあーく若い頃のチヨコさんってやんちゃしてたイメージがあったりするんだけど」

「いやいや、そんな事ないよ？ 普通に女子学生してたよ？」

「本当？ なんかとっかえひっかえして性欲に明け暮れてたー、とかは？」

「そんな変態女だと思っ？」

「思いませんっ」

「よろしい」

「私もどつちかって言う普通、と言うか大人しい方だったからなあ……でも友達と遊び呆けてた時は本当に楽しかったなあー」

「誰しもが美しい思い出を持つてるけど……思い出は思い出のまま、もう二度と青春の香りを堪能する事も、ましてやそれに触れることも出来ない」

「わけじゃないんだなこれがっ！」

「……そうなの？」

「そうなのですっ」

「うーん……なんだろうね、すっごく犯罪の香りがしてくる気がするんだけど……」

「とんでもないっ。これはむしろ超絶健全なことだよ？ 誰も困らないよ？ そう、それこそは」

・おねロリ系百合について

「ロリ少女をおねさんが可愛がるだけで何もかもを得て満たされるのですからねっ！」

「……うん。とっても犯罪臭漂うね？」

「そんなことないっすよっ！ 同じ女どうしよ？ ん？ どこに怪しい部分があるの？」

「開き直っちゃうところがもう……まあそれは置いておき、これも最近ようやっとなりだしたね？」

「んだねー。おねシヨタは随分昔からあるけど、おねロリは本当に数少なくて、今だって創作含めても作品その物が滅茶苦茶少ないし、あったとしてもコア過ぎて一部の人しか知らなかったりだし……」

「百合、かつロリ属性、かつ歳の差属性があるからね。これは中々に人を選ぶよねえ」

「おねシヨタと双壁を成すジャンル、と個人的には言いたいけどまだまだ知名度が足りませんのう……pixiv辺りじゃ同土達が頑

張ってるけど、そこら変も知られてない事多々あるしねえー」

「……………内容のほとんどが小学生女子と教師物ばかりだね？」

「やっぱり身近、かつ展開させやすい関係性だしねえー。それはまた別にしても……………おねシヨタみたいに近所のおねえさん、友だちのおねえさん、従姉だったりいろいろ……………中には友達のお母さんとかもあるみたいだねえ」

「字面に見ると本当に人を選ぶね？」

「しかも徹底的に攻める構図がほとんど……………つまりは肉食、かつアダルト思考だから若い子には向いてないんじゃないかな？」

「うーん、やっぱり百合は肉食ばかりだねえ……………」

「ところがどっこいっ！ほんわかほのぼのしたおねロリもやはりあるですよっ！この電子電脳の世界には多くの作品があるのですよっ、ぜひいろいろ探してみようっ！」

「Web小説か……………私、基本地の文多いのって読めないんだ」

「……………えっ」

「え？」

「い、いや、そうなの？」

「うん。寧ろ地の文出てきたらすぐブラウザバックする。それくらい嫌いかなあ」

「……………ええっ!？」

「な、なにを驚いてるの？」

「じゃあ普段何読んでるのっ」

「えーと……………その……………SSとかかな……………？」

「か、書くと読むとじゃ全然違うって言うからね……………あ、あるよねそういうのもね……………」

「堅苦しい話とか大嫌いだし」

「たぶんそれ以上言ったらダメだよ本気でっ！」

「今日もメタいのはさておき……………アニメだとおねロリは何があるかな？」

「一応、エル・カザドは数に入れていいんじゃないかなあ？」

「あー……また少し古いの出てきたね？」

「ノワールから流れてそのまま見る人多いと思うけど……エリスとナディの絡みは見ててこう、何と言つか……んふふうってなるよねえ」

「中々リアルな反応だね？　けど歳の差って本当にいいものだよねえ」

「……おねえちゃんっ」

「はううっ……そう、それなの、幼い子が大人に頼るような感じだとか、不安げに見上げてきたりだとか、後は袖引っ張ったり手を引いたりする仕草だとか少し強引に押し倒した時の恐怖した顔とかも結構」

「おっ、落ち着いてチヨコさんっ、相変わらず幼い子が関わると暴走するのなあっ」

「おねえちゃん呼びは卑怯だよ、ケーキちゃん……」

「けどまあ言わんとしてる事は大体分かったよ。たとえば大人に対する信用信頼から生まれた絆、そこから発展した愛情……或いは憧れだったり羨望する気持ち。下手したらすごい純情な関係だったりするのかもね？」

「濁りが無いからねえ。　ロリ側は常々必死になるけど、それって追いつきたいあまり、或いは自分を対等な立場の人間として見て欲しいがあまりにそうする訳だからね。　それって純愛だよねえ」

「おね側がそれに対してどう言った反応をするかで物語も大きく左右するけど……やっぱりおね側は常々優位と言うか余裕な立場であって欲しいなあ」

「それはなんで？」

「んー……やっぱり歳を取ったからかなあ？　若い子には負けられないですよっ」

「そんな理由なの？」

「うそだよそっ。　理由は……暴走したり不安になったりするロリ側をしっかり愛して、そして受け止めて、更には優しく癒してあ

げて欲しいから、かな？ 受け止める側がしどろもどろしてたら何か嫌じゃない？」

「……………」

「え？ なに？」

「……………ケーキちゃんって時々ドキッとすること平然と言っよね？ 無自覚？」

「え？ なんか変なこと言った？」

「ううん？ 心優しい女の子だなあって思ったの」

「うーん？ なんかよく分かんないけど……………とりあえずは毎度の」とくに検証考察妄想すたーとうあっ！ー！」

『みてみてっ、チヨコおねえちゃんっ』

『ん……………どうしたの、ケーキ？』

『ほら、これっ』

『……………これ、マフラー……………？』

『うんっ』

『へえー……………上手く出来てるね？ でもどうしたの、マフラーなんて編んで』

『ええとね、その……………』

『？ 何でモジモジしてるの？』

『……………それ、あげるっ。 おねえちゃんの為に作ったのっ』

『……………え？』

『あのね、おねえちゃん。 いつもいつも、色々面倒見てくれてありがとっっ。 最近寒いでしょ？ だから、よかったらそれっかってくださいっ』

『っ……………もっ、ケーキは……………』

「い、いやだった……?」  
「……いらつしやい、ケーキ?」  
「ん……」  
「……ありがとうね。 凄く嬉しいよ?」  
「ほんとつ? ほんとにほんとつ?」  
「本当だよ? 大切にに使わせてもらうね、このマフラー」  
「えへへっ……うんっ」

「……まるで手慣れた書き方だね?」  
「それこそメタいけど、おねロリは書いてるからねえ。 やっぱり姉妹でのおねロリがベストかなあ。 他人だともよそよそしくなっちゃんだよねえ……」  
「けどストーリーを展開させやすいのは……やっぱり他人の場合かな?」  
「そうだね、自由度は多分増すと思うねえ。 けど血の繋がりが如何程に重要なのかは語るに及ばずっ」  
「歳の差があると尚更萌えるからね……うん、やっぱりおねロリはいいものだよ」  
「……チヨコおねえちゃん?」  
「……ん? なあに?」  
「ええとね? なんでカウンターから席側に移動してるのかな?」  
「そうだねえ、さつきから私をおねえちゃんおねえちゃんって連呼してる誰かさんにお仕置きをする為かな?」  
「えっ、いやっ、そんな悪気があったわけじゃ」  
「人をその気にさせておいて何を言ってるの、ケーキちゃん?」  
「……お店閉めてからにしょ? ねっ? ねっ!?!?」

「もう時既におすし、だよ？」

「あ、これ本気でだめなやつだ」

こうして夜は更けていく。

## 12 ゆるい系百合について

とある夜の風景。

「るっ、らっるっ、らっピアノは世界のゆっ、めさっ、く野原にメロディい〜」

「また懐かしい歌だね?」

「んー、思い返せばもう十五年前の作品だったんだねえ……つい最近のような気もするんだけどなあ」

「あずまんが大王、かあ。当時としては珍しい空気の作品だったね?」

「うん、そうだねえ。ああ言ったゆるーくてのんびりとして、それでいて風刺やらギャグを取り入れた四コマ漫画って珍しかったかも?」

「ある意味ではそう言った作品……今で言う所の萌え四コマの元祖だね?」

「んだねえ。それでいて女の子たちばかりのキャッキャウフフな作風は今では広く浸透してそれが普通みたいになっただね」

「そう考えると彼の作品の影響力はとんでもないねえ」

「世界的にも凄まじい人気を誇るらしいよ? 秀逸な漫画の一つとして挙げられるくらいなんだってさ」

「そうなんだ? 作品の掲載期間は長くはなかったけど……けど日本国外で意外な人気を誇る作品って多いよね。寧ろ外国からの支持や評価が高い作品って数多かな?」

「例を挙げるならヘルシングとかトライガンとかかなあ? 両作品とも知名度はそこまでないし国内じゃそんなにファンって見かけないねえ」

「オタク文化では広く知られてるし人気も高いけど、所謂一般の部類からしてみれば無名に等しいみたいだね？」

「まあ全体主義国家ですから、日本は。これはしゃーなしっ」

「とは言え名作だとか傑作が埋もれて忘れ去られていくのは悲しいね……知る人が知っていけばいいのかもしれないけど、これだけ素晴らしい作品が世には溢れてるんだから、折角だし触れて欲しいかな？」

「そうだねえ、勿体無いからね……とは言え最近の作品とかわたしさっぱり分らないんだけどねっ」

「私も同じくかなあ……映像系は特に分からないや。最後に見たアニメってなんだったっけ……多分三年前で知識止まったままかな？」

「一度見る習慣なくすと自然とぱったりするんだよねえー……漫画は好きな時に見られるからいいけど、映像は何ていうか録画しても見る機会を逃すって言うか、やっぱり手軽さが漫画とは段違いだねえ」

「昨今の萌えブームとかもさっぱりだけど……けど何となく、百合作品が流行ってる気がするね？」

「そうだねえ、女の子の子してるのが多くなってきたかなあ？寧ろ男が出てくる作品は邪道っ、ていう人たちもいるくらいだし」

「その割に肉食極まる作品って少ないみたいだね？」

「草食系が増えれば必然的にニーズはそう言う方向に向かうんだと思うよ？ 酷い言い方だとクレイジーサイコレズなんてのもあるらしいよ、差別用語的な物として」

「えっ、なにその単語っ、逆に面白いっ」

「センスが素晴らしいよね、これは逆に見習いたいくらい……なのはまあおいておき、もしかしたらこの草食系の切っ掛けになったのって、あずまんが大王みたいなのんびりほんわか日常系が流行り出したからじゃないかな？」

「ふむ……のんびりほんわか、って言うと、つまりは」

・ゆるい系百合について

「ゆるい感じの百合作品かな？」

「まあ一概に百合と定義できる物ばかりとも言い難いけど……例えば忘れ難き作品、らき すたから始まり、続いてのブームはけいおん！とかだったねえ」

「あー……前者は男子出てくるけど、基本可愛らしい少女達の戯れの日常を描いた作品だったね？」

「けいおん！に関してもだね。個人的にこう言う日常系ってすごく苦手なんだけど……ここからまた色々な女子オンリーの緩い四コマ作品が生まれては消え生まれては消えを繰り返してるね」

「映像化した物も多いけど……でも百合の発展には大層貢献した作品ばかりだね？」

「一時期はらき すたまけいおん！も百合同人大量に出回ってたからねえ……やっぱり可憐なる少女達の戯れを見るとそう言うことを想像しちゃうんだよ」

「まあそれによって百合ファンや百合作品が多く生まれて増えたのは喜ばしい事だけど……あのゆるい空気はどうも癖があるね？」

「そうだねえ、好き嫌いはっきり分かれると思う」

「特にあの作品はある意味伝説だね？」

「あの作品？」

「キルミーベイベー！」

「……あー。あれは本当に凄かったね。三十分が一時間に感じるくらい」

「けど不思議とあれだけはまともに見られたなあ、私」

「え、そうなの？」

「うん。らき すたは一話視聴で限界で、けいおん！もあの空気感に馴染めなくて三話くらいでやめたけど……キルミーベイベー！は最後まで見たよ」

「……それって多分OPとEDがあったからなんじゃ……」

「あれの中毒性は語るべくもなくつ。OPが中々面白くて、意外とドラムの構成が凝ってるんだよ?」

「え、そうなの? なんか不協和ばかりで勢いとノリだけに思えたけど……」

「ゴーストノートの嵐だよ? とは言えそこまでハイレベルとは言えないけど、結構味のあるドラムだね?」

「音楽の話はまあおいておき……あずまんが大王から始まった日常系、あるいはゆるい系の百合作品は今では数え切れない量になった訳ですよ」

「これの素晴らしい所は女子高生達の何げない日常を窺い知れて、更にはくどくもなくさっぱりとした掛け合いを気軽に読めたり見られる事かな? つまり疲れないんだね、下手に思考する必要がないから」

「逆に中身がないって意味なんじゃ……」

「いやいや、中身なんて今時求める人の方が少ないからね、だからその程度で良いんだよ。お堅い内容を読んだり見たいなら本を買うか映画を見れば良いからねえ」

「うーん、日常系やゆるい系の神髄かあ……そう言えばこれ見よがしなタイトルの作品もあつたね?」

「ん? 何かな?」

「ゆるゆり」

「……あー。ごめん、見てない」

「え、そうなの? それはなんで?」

「タイトルでの出落ちが半端じゃないって言うか、どうも、その……見る気が起きなかつたかなあ」

「まあわたしも見てないんだけど……結構個性溢れるキャラが出るみたいだよ?」

「そうなの? 百合と言えば肉食な私からすればあまりにも受け入れ難いタイトルだから……なんかそれ百合って名づける必要性ないんじゃないの、って思ってたけど……うーん、暇があったら見てみ

ようかな？」

「結局、百合の妄想やらをするのは読者たち 見る側に様々な憶測をさせるのがゆるい系の百合作品におけるやり口なんだろっね。

寧ろ作中での穏やかな空気とは対極的な肉食な景色に発展させるのも結構そそるかも？」

「おお、そう言う楽しみ方もあるんだね？ それはそれで二次創作が捗るし、同じ作品のファン同士でカップリングの妄想とかで話題が膨らむね？」

「うーん、肉食こそが百合……つまりは結果が目に見えていて、疑うまでもなく少女が少女に恋をするのが当然だったと思う層もいるけど、見えない部分、不明確な部分を妄想して発展させる楽しみが今時なのかもしれないねえ」

「時代に適応できないならそれまで、懐古ばかりでは何も進展はない……そろそろ新たな一步を踏み出そうかなあ」

「あ、けどあの作品は凄いなと思ったよ、アニメ化された時」

「ん、何かな？」

「ストライクウィッチーズ」

「……あれは本当に凄かったね？ あんな出鱈目な見た目でアニメ化していいのかと思ったよ」

「パンツじゃないから恥ずかしくないもんっ」

「そのの前身となったスカイガールズは凄く好きだったな。 ヴァー

ージンズ・ハイとか未だに歌えるくらい」

「懐古ばかりはよくないけど……温故知新、過去があつて今があるわけだから、やっぱり一度は目を通して欲しいとは思つにゃー……」

「まあ、とは言え私達にとっては新境地だけど……いざ検証考察妄想してみよっか？」

『ケーキちゃん、はいどうぞー』

『ん……なにこれ？ チョコレート？』

『ふっふー、今日は何の日でしょう？』

『ええと……なんだろう？』

『もうっ、今日はバレンタインデーだよ？ とてとても大事な日だよ』

『大事、って……まあ食べられる物ならうれしいけど』

『あ、ひどいんだ、そんなこと言って。折角の手作りなのに』

『え、本当？ 友チヨコにまで手作りって結構気合入ってるね？』

『んー、まあね？ まあその分期待してるからね？』

『……ん？』

『ホワイトデーっ』

『……ああ、見返り目的かあ……』

『なんだっいたら十萬カラットの指輪でも可だよ？』

『それわたしが損するだけじゃないかな？』

『そう？ お返しとして私も指輪あげるよ？』

『それ結局お返しにならないよ……』

『ふっふー、いいですよっ。そのまま人生すべてをよこすのだっ』

『はいはい、何か適当に用意しますよー』

「……今まで様々な物を書いてきたけど、多分今までで一番書くのに手古摺ったと思うっ」

「またメタいねえ。何分かったの？」

「……十五分」

「長すぎるね？ 普段二時間で一万字書く癖に」  
「それこそメタいよつ。 ネット探してから始まって詰まってバレンタインデーネタに逃げる……最早おなじみの手法だねっ！」  
「日常系、ないしゆる系……慣れてないと何を書いていいのか分からないからね。 定義も曖昧にしか把握してないと尚更ね？」  
「ぐぬぬっ……わたしはつていけるのだろうか、百合のない世界のスピードにっ」  
「溢れてるけどね？」  
「はあっ……あれ？ でも今気付いたけど……もしかしてわたし達の何時もの風景つてゆるい感じなんじゃ？」  
「え？ そう？ 結構真面目にやってない？」  
「んー、そうかなあ？ まあいいか……チヨコさんおかわりっ」  
「はいはい……次は何飲む？」  
「んむう、そうだなあー……何か柑橘系のさっぱりした奴が飲みたいですっ」  
「ふふっ、かしこまりました」

こうして夜は更けていく。

### 13 幼馴染系百合について

とある夜の風景。

「ねえ、チヨコさん」

「なあに、ケーキちゃん？」

「わたしね、気付いた事があるんだ」

「気付いた事？」

「うん。それはね わたしたちの会話は理屈っぽいにも程があるって事だよっ！」

「初っ端からメタいね？ あのね、ケーキちゃん、メタファーにも使いどころがあつて、更には良いメタと悪いメタって言うのが」

「そこだよっ、それぞれっ！」

「え、何が？」

「取り扱う話題全部が理屈っぽいよっ。意見も説明も客観視ばかりでとても感情性を感じないよっ」

「ええ……でもそれが検証考察の前提条件だよ？ むしろ主観で物を捉えるだなんて……」

「何を仰るウサギさんっ」

「ぴよんっ」

「うぐっ、きっ、きゃわわにも程があるっ じゃなくてっ！」

「あれ、誤魔化せなかったかあ」

「感受性って言葉があるように、結局好き好きって言うのは主観で得るものっ！ 何もかも理屈やらで説明してしまうのは如何なのんっ!?!？」

「うーん、これまた論理的に語ると、そもそも人って確実に客観的な立場になれないんだよね。それと言うのも感情を持つからであ

つて、更には話題を得てそれを意識するって事は既に」

「はいはいっ！ タンマタンマっ！」

「え？ なに？」

「いつも通りじゃんかっ」

「そうだけど……」

「だからそのままじゃダメなんだよっ」

「ええ……だつて主観で語るってなると、もう本当に、萌えー、とかこれ嫌いー、とかそんな感じになるよ？」

「それもまた一つの意見であつて、それを切っ掛けとして論争に傾れるのがいいんじゃないでしょうか」

「……ああ、そう言う考えもあるけど それって結局は価値観の押し付け合いだよ？ 人は皆相対的であるのが絶対的にして前提条件だよ？ ましてや正否や善悪を定めるだなんて」

「ぬぐああああっ！ これだから理系はもーっ！」

「文系だけどね？」

「えっ、それでっ？」

「うん。でもね、これだけは口を酸っぱくして言うけどね、世は全て懐疑を以つてして臨むべきなんだよ？ 是非が成り立つ事を知つてれば、争う必要なんて皆無だつて分かると思うよ？」

「いやいや、語り合つたり意見をしあうことこそが面白味なんだつてばっ」

「えー……それって結局自己満足じゃない。もっと理屈だつて論理的な思考を持とうよ……」

「そもそもそれを皆が理解してたら争いはないよっ。誰もが認められる訳じゃないのよさちヨコさんっ」

「それが如何程の問題だと言うのだからっ」

「魔王様のマネはいいからっ！ やっぱメタイよ何もかもっ！」

「むう……何だか今日のケーキちゃんは随分と容赦ないね……？」

「まあね……これに気付いた時からわたしはこのままじゃダメだと思ひましたっ。まるでそれは違えることの出来ぬ戒律の如しっ」

「……………ん？」

「そうっ、世に絶対的なことはないにせよっ、客観的に見て意見を統合するだとか達観するだなんてのは正に蛮行っ！ 例えるならば」

・幼馴染系百合について

「幼馴染が負けフラグだって言うくらいにそれは悪しき所業なのだぁーっ！」

「……………あまりにも酷い無理矢理なつなぎ方だね？ むしろそれでいいと思つたの？」

「かんけーにやいっ！ 兎角っ、よくないよそう言う風に物事を見るのはっ、もつと素直に感情の赴くままに言葉を紡ぐべきですよっ！」

「ケーキちゃんかわいい」

「……………え？」

「ケーキちゃんだいすき」

「がはぁあっ！」

「わあっ、大丈夫ケーキちゃんっ！？」

「くっ、なんたるっ……………これが主観による素直な感想の威力っ……………やはり意思を持つ生き物であるならば理屈だった言葉なんて無用だということかあっ……………！」

「意外と余裕だね？」

「まあ……………毎夜毎夜聞かされてるのである程度はその、ね……………？」

「……………お客さんいないからいいものの、もしも誰かに聞かれてたら大変だなあ」

「とっ、兎に角っ……………今日の話題は幼馴染属性ですよチヨコさんっ」

「当て馬確定ポジだね？」

「それやめたげてよぁーっ！ なんで毎度毎度幼馴染は負ける前提なのさっ！ 幸福になるキャラ少なすぎて哀れだぁーっ！」

「最早これこそ語るべくもなく、そしてその余地すらもないくらいに……そう言う位置づけとして認識されてるよねえ」

「ううっ……なんでさっ、健気でいつだって主人公を陰から支えたり重要な時には傍にいたり色々してくれる幼馴染がっ……何でほとんどの作品で見守る立場になったり諦めたり失恋したりすんのさっ！ ひどいひどすぎるっ！」

「幼馴染属性ってそれこそ客観的な立ち位置に等しいから仕方ないよ。だって物語の軸は主人公にあるわけで、ヒロインとして扱われるにしても主人公を誰よりも知ってるからこそ敢えて掘り返せない時もしばしばだよ。だから扱いが二の次、三の次とね？」

「やめてくださいよそのメタファーっ！ っていうかそれが様式美みたいな扱ひも勘弁してよっ！ スポットあてましようよっ！」

「けど時には重要なポジになるよね？ たとえば主人公が暗い過去を背負ってた場合、それに関与しているってケースが往々だよね」

「うんうん、そういう時は実に活躍するよねっ」

「それでヒロイン枠に癒しポジとられてお役目御免なことおいよね。ようは過去の解説要因とか主人公の闇に関する一つの原因になるわけだね？」

「いい加減にしましょうよ本当にっ！ 哀れにも程があるからっ！」

「だとしても発展させた後の胸ドキ感様々な属性のヒロインの中でも少ないし薄いよ？ だって長い付き合いだもの、つきあった所で今更やることなんてにやんにやんとかくらいだし……」

「だからって新参ヒロインを優遇するのはどうかと思いますっ。」

「それに安心感も説得力もパないはずっ」

「でも見守る立場にする事で読者側 第三者に近い立場になっでより印象に残り易かったりキャラを立たせるのが安易になるね？」

「そう言う点ではやっぱり使い勝手がいいと思うよ？」

「まるで物のように言っちゃうねっ!？」

「恨みがあるとか嫌いな訳じゃないよ？ 寧ろ大好だしね？ 幼馴染って大体ツンデレかデレデレの両極端に別れるけど、どっちも素

晴らしいと思うよ？ けど歴史が物語るねえ」

「時には起こせよムーブメント……これからの世を引っ張る者等がこの認識を引っ繰り返すべきなのだあーっ！」

「けれど親密具合では本当に幼馴染に敵う存在は皆無だからね。」

ある意味は姉妹の属性よりも更に近いと言えるからね。異性で他人で幼少期からの顔馴染みって恋心寄せるにしても至極納得できるし、他にも過去と言えば掘り下げる際にいくらかでも情報添付できるし」

「これに足す事の百合と言うジャンルにおいてですよ、やっぱりそれって素晴らしいのですよ。だってやっぱり同性って言う引け目があるから今まで恋情愛情を隠して伝える事もせず見守ってた訳だけど、それこそ幼馴染だからこそに説得力がある訳ですよ」

「今日は熱弁するね？」

「当然ですよ。幼馴染萌えとしては現状の扱いは誠に遺憾でありますっ」

「凄いお怒り様だねえ……」

「こうなったら検証考察妄想でこの鬱憤を撒き散らしてやるっーっ」

『でね、チヨコちゃんっ。あの子がね、今度一緒に遊園地にいつてくれるってっ』

『……そう。よかったね？ 楽しんできてね？』

『うんっ。応援しててねっ、チヨコちゃんっ』

『っ……うん。ケーキちゃんの幸せだからね。応援するに決まってるよ』

『ふふっ……なに着てこうかなあ？ やっぱりこの間買った新品の

お洋服かなあ』

『ケーキちゃんは何着ても似合うよ?』

『え、そ、そうかな……?』

『うん……本当にそう思ってる。ほら、こっちにきて? 着させ

てあげるから』

『うんっ、おねがいつ』

『……本当に、綺麗だね、ケーキちゃん』

『や、やめてよお、恥ずかしいよそんなのっ……』

『でも、本当にそう思ってるから』

『……あの子も、そう思ってくれるかな』

『……』

『ねえ、チヨコちゃんはどう思っつ?』

『……そう、だね。きつと……そう思ってくれるよ』

『そうかな? えへへっ……ああ、はやく来週にならないかなあ……』

……』

『ふふっ……楽しんできてね』

『うん……あっ、そうだ、ねえチヨコちゃんっ』

『ん? なあに?』

『よかったらチヨコちゃんも今度一緒に行こっつよっ』

『っ』

『絶対楽しいからさ? だから一緒に』

『……なんで、そう言っつこと言っつの?』

『……え?』

『ねえ……ケーキちゃん。何を思ってそんな言葉を言ったの?』

『私の心を……どうしていつもそうやってっ……』

『……チヨコ、ちゃん?』

『っ……!』

『わっ』

『ケーキっ……』

『や……やだよっ、チヨコちゃんっ……怖いよっ、どいてっ……』

「……そんなにあの子が好き？ 私よりも？ いったって私が傍に居たのに。私が一番ケーキを知ってるのに。なのにあの子の方がいいの？」

「チヨコちゃん……？」

「……やっぱりダメ。どれだけ誤魔化しても、どれだけ我慢しても もう、耐えられない」

「あつ やだっ、やだよっ、どこ触ってるのっ！」

「ねえ、ケーキ。教えてあげる。誰が一番あなたを幸せに出来るのか。誰が貴方を一番愛しているのか 十分なまでに教えてあげる」

「チヨコ、ちゃんっ」

『

「ドロっドロ最高だぜえっ……ふひっ、ふひひっ……！」

「……凄まじく濃い内容だね？ これだけでバックグラウンドが見えてくるって……相当好きだね、こう言う系統？」

「いやあ、やっぱり痴情の纏れとか少し病み気味な子って動かしやすくて……あとは可愛いしっ」

「けど内容はさっきまで否定してた感じだけど……」

「そっ、それはあつ……やっぱり幼馴染が輝くのはこう言う景色だと思えますっ！」

「結局は好みなんだねえ……」

「け、けどね？ 本当に幼馴染には報われて欲しいと思ってるのですよ？」

「説得力にかけるね？」

「うぐっ……違うんですようっ、これは抗えぬ世の波に揉まれた結果こうなったのですようっ！」

「うん、そうだね。 やっぱり様式美の前には何人たりとも無力になるよね」

「わっ、わたしは悪くないのだあーっ！」

「うんうん、そうだねえ……所でケーキちゃん？」

「うううっ……なんでしようかつ……」

「内容を見やるに……大抵私が攻めのパターンが多いね？」

「えっ」

「それはやっぱり、常日頃の景色があるから」

「おっ、おわかりっ！ その話題はここではなりませんよ  
チヨコさんっ！」

「ふふっ、そうだねえ？ けど毎度そう言う話をするから……身に  
全てが降りかかるんだよ？」

「ぶふうっ！」

「わっ、吹き出しちゃったっ」

「げえっほげっほっ！ みっ、みじゅっ、みじゅうっ！」

「は、はいはいっ、ただいまっ」

こうして夜は更けていく。

## 14 あまじょっぱい系百合について

とある夜の風景。

「んむんむっ……おいっひいーっ!」

「ん……気に入った、そのお酒?」

「うんうんっ、気に入りましたよチョコさんっ。 何これ可愛くて美味しくてお洒落だねっ?」

「キールロワイヤルだね。 甘いお酒好きならこれがベストかもね?」

「カシスリキュールとワインのマッチっぷりがたまんないっ。 おまけに……これっ。 このブルーベリーとかラズベリーとかっ。

これがまたいいねっ!」

「良いアクセントになるし、見栄えも可愛らしいよね。 ちゃんと食べられるし、酸味もいい塩梅でしょ?」

「たまんないねえ、この甘酸っぱい感じ……最近はくどい寄りの甘いお酒ばかり飲んでたけど、やっぱりフルーツリキュールは外れがないねっ」

「ちなみにこう言うリキュールもあるよ?」

「え……? 何これ……?」

「スイカ味ですっ」

「……なにーっ!? スっ、スイカあっ!?!」

「とは言えそこまでスイカスイカしてる訳でも無いし、他にも大量に面白いリキュールはあるけど……けどそろそろ夏だしね。 今年の季節のカクテルはスイカを使おうかな」

「え、ええっ……それ美味しいの……?」

「むっ。 私の腕を信用してない?」

「し、してるよしてるっ」

「……ふうん？ なら丁度いいや、実は今日スイカを買ってきたんだ。少し早いけど」

「あ、あはは……用意がいいね？」

「……なんか反応が微妙だね？」

「そんなことないですっ」

「分かった。分かったよケーキちゃん……ちょっと驚かせてあげるから」

「わっ、わっ、何で急に包丁をつっ！？ そんなっ、まさかあなたを殺して私も死んでやるーってやつうっ！？」

「そんなわけないでしょう？ はいスイカどーんっ」

「わあ、真っ二つに切れたね」

「それで、これが必要な分だけ果肉とって、それで絞って、更に濾して……よし、スイカエキス抽出完了っ」

「手馴れてるっ……あ、なんか夏のかほりがっ……」

「そしてスノースタイルにしたグラスに氷を入れて、スイカエキスを入れて、後はウォッカを入れて、ステアすれば はい完成、スイカのソルティドッグですっ」

「わあ……なんか結構良い色合いだねえ？」

「軽くグレナデンシロップもいれてみたよ。さっぱりな舌触りに後からくる深い味わい……さあ飲んでみようか？」

「うっ……じ、実はわたしはスイカが苦手な物ですっ」

「飲んでくれないのっ……？」

「飲みますよ当然でしょうっ！？ そんなうるうるした目で見られて飲まない奴がいるわけないよねえっ！ いったきまあーっすっ！ んむむむっ！」

「……どう？」

「……」

「……ケーキちゃん？」

「うんまいなあーっ！ 何これっ、えっ、すっごい美味しいね」

っ!？」

「よかつたあ、てつきり戻しちゃうのかと……」

「いやいや、これは本気で美味しいっ……塩梅効果つてまさにこれだねっ、スイカの甘みはさることながら、しかしそれを引き立てる塩つたらもう憎いねこのこのっ。わー、これ本当にさっぱりしょっぱくなくていくらでも飲めそうっ!」

「でもそのウオツカスピリタスだから気を付けてね?」

「通りでキンツキンに冷えてるなあと思ったよっ! そうだよ冷凍庫から瓶出してるの覚えてたもんっ!」

「ウオツカはやっぱスピリタスに限るよ? ぐつと飲んでがつと寝るには最適だし、スピリツツ系の味は実に透き通つてて頭が逆に冴えるからね?」

「た、確かに妙な癖もないし、スイカの風味が引き立てられてるけど……いやそうじゃなくつてっ」

「でも飲み干したね?」

「ごちそうさまっ」

「ふふっ。はい、おそまつさま?」

「内容には少し驚いたけど……いやあ、しかし苦手だと思つてたのに、まさかスイカを口に含む時がくるだなんて……」

「そんなに苦手だったの?」

「んー、何と言いましようかね? スイカと塩の奏でるハーモニー? あれがですね、こう」

あまじょっぱい系百合について

「んむむむっ、って感じになるじゃないですか? あまじょっぱくてっ」

「……うん。何となく分かつた気もするけど……本当に雑な入り方だね?」

「気にしない気にしないっ」

「って言うか甘酸っぱいじゃないの？」

「酸っぱいってなんか汚い気がするんだよねえ。ほら、何か時間経ったら饜すえたニオイしそうだし」

「成程、酢ではなく塩なら腐らないし異臭も放たない、と？」

「故のあまじよっぱいっ」

「あまじよっぱいっ」

「くっ……チヨコさんが言うのと破壊力がっ……」

「私のことはさておき……あまじよっぱい系、か。それってつまりは 草食系でしょ？」

「初っ端侮辱したあーっ!？」

「いやいや、別に侮辱じゃないよ？そもそも肉食の対義語として草食があるわけだけど、これはつまりは積極的じゃない、否定的、或いは遠慮がちな系統を言う訳だよな？」

「ま、まあ確かにそうだと思っけど……けどなんか草食系って見下してる感があるというか、ちょっと不適切だと思っますっ」

「そればかりはイメージとか世間の下した評価が起因する訳で、やっぱり属性として、そしてカテゴリとして草食はあって当然だと思っよっ？」

「うーん、まあそうなのかなあ……」

「それで……あまじよっぱい系について今日は語るんだね？」

「と言うか、これって恋愛作品じゃあって当然、寧ろそう言っただ胸キュン胸ドキ、モヤモヤグ又又っするの当たり前前だよなえ」

「それが恋愛の醍醐味って言うか、見る側からすれば萌えポイントだからねえ」

「すれ違ひしたり喧嘩したり、不安を抱いたり、実はお互い好きなのに素直になれなかったり……もうこいつら結婚しろよっ、って思っ瞬間。それがあまじよっぱい系だと思っですますっ」

「ふむっ……ようは意思の疎通が満足でない状態、或いは価値観の相違を得た場合、ないしは軋轢確執を感じた場合に起こり得る現象だね？」

「もう少しあまあく、やさしく表現してほしいなあ」

「 気付きなさいよバカっ、状態だね? 」

「 すっごい分かり易いねっ! 」

「 喧嘩したりするところ言う思考に走るヒロイン多いよね。 なによ、私の気もしらないくせに…… って感じの。 それで相手も意地になってツンデレこくんだよね 」

「 結局溝が広がって深まって、でも相手に対する愛の気持ちは真実で…… それでもすれ違いばかりを繰り返す。 見てることちは時々殴りたくもなるけど あれこそ青春ですよっ 」

「 子供だから許される、とも言えるけどね? 良い歳した大人がそんなすれ違いだとかしてごらん? 今までの人生なにしてたのってなるよ? 恋愛経験ないの? って 」

「 そっ、それはそれで子供っぽいヒロインきゃわたんって感じになるからいいんだよっ! 」

「 意固地になる…… まあ分からはないけど、正直ね、価値観の合わない人と一緒に居たって苦痛でしかないよ? 」

「 ブラックな事言わないのっ! 」

「 本当に居心地のいい人を見つけるべきじゃないかなあ、とか時々ふと我に返って思うよね。 漫画とか見ながらね? 」

「 毎度毎度何でチヨコさんは現実主義な上に論理主義なのさっ 」

「 けどこれが私だよ? 」

「 知ってるっ。 だから好きっ 」

「 つ…… まさかの不意打ちだなんてっ…… 」

「 ふふっ…… どうですう、チヨコさん? 何だかんだ言ってもあまじよっ ぱい台詞寄越されたら誰だってムネドキイツてなるのよさっ 」

「 不覚…… ケーキちゃんにしてやられるだなんてね? 」

「 ふっふっふ…… わたしとて日々成長しているのだよっ! そしてそれを証明してみせるっ! この検証考察妄想フェスティバルによつてねっ! 」

『ね、ねえ、チヨコさんっ……………』  
『な、なあに、ケーキちゃんっ……………』  
『その、よかったら、なんだけどねっ……………?』  
『ん……………うん』  
『……………手っ、つなごっ』  
『ふえっ』  
『……………だめ、かな……………?』  
『え、と……………そのっ……………』  
『わ、わたし達 恋人同士なんだよっ?』  
『っ……………はっ、はずかしいから大声で言わないでようっ』  
『わっ、い、ごめんっ……………(顔まっ赤にしてるチヨコさん……………かわいすぎるよおーっ!)(』  
『……………うっ』  
『……………チヨコさん?』  
『……………んっ』  
『……………え?』  
『んっ』  
『ん、って……………なに、この手?』  
『に、にぎっても……………いいよっ……………』  
『っ……………』  
『は、はやくっ……………恥ずかしいからっ』  
『あっ……………うっ、うんっ』  
『……………』  
『……………』  
『……………手、あたたかいね(顔、見れないよ……………(』  
『……………うん。そうだね……………(ああああっ……………幸せだけど恥ずか

しくて死ぬつ』

「……初心だね？」

「つまりそう言うことなのですよ、チヨコさん。草食って言うのは、つまり 初心な人を言うのさっ……」

「うーん、けどまあ確かにそうと言えばそうなのかな？ 所謂あまじょっぱい関係ってお互い勝手がわからなくて、更には感情をどう伝えて良いのかも分からなくて空回ってる状態を言うのかもね？」

「経験が少ない、或いはないから戸惑って恥ずかしくて、時に後悔したり怒ったり、自責の念に駆られたり……それって凄く初心だと思っなあ、わたし」

「ピュアだねえ。 純心とはこう言う事を言うのかな？ 最近ではこう言う系統の百合も多いから、大多数の人がそれに安らぎを得るんだらうね？」

「百合とレズの境界はそこにあるらしいですよん」

「……ふむう？」

「曰く、肉体関係に発展したらレズ、それ未満ならば百合、だとか」  
「……ああ、昔から言われてるねえ。 けどそれって実にナンセンスだよねえ。 恋仲に発展したらそれは愛の関係だから百合もレズも関係ないよ。 美しい物は愛でる。 それが共通認識でいいと思っなあ」

「これもまた好き好き、何をどう思い判断するかも千差万別。 正否や善悪を定めるのは、やっぱりよくないのかにゃー……」

「……けど、百合だらうとレズだらうと、私の気持ちは真実だし、それを定めるのは私だよ？」

「えっ……」

「……つまり、好きってこと」  
「……フライミートウーザムーンかあ。 お洒落だなあ……」  
「ふふつ。 月が綺麗だよねえ、今夜は」  
「そうだねえ……」

こうして夜は更けていく。

## 15 ラブラブ系百合について

とある朝の風景。

「ん……んーっ……アラームうるさいっ……」  
「むにやっ……?」  
「ありえっ……ありゃ、ごめん、起こしちゃった、チヨ」さん?」  
「んー……? 朝あ……?」  
「うん、ごめんごめん」  
「……んー。 おはよう、ケーキちゃん……」  
「あはは……おはよう、チヨ」さん」  
「ふああっ……ねむいっ……」  
「相変わらず朝は弱いねえ」  
「まあ……仕事柄ね……夜にお仕事してるから……」  
「そうだよねえ……ごめんね、まだ寝てていいよ?」  
「……んんっ。 いや、ちゃんと起きるよ」  
「無理しなくてもいいのに」  
「だって今日月曜日でしょう。 週の始めくらいはしっと……ふあ  
あっ」  
「あははっ……もう、可愛いなあチヨ」さんは  
「んー……そんなことないもん……」  
「……そして甘えん坊さんだよねえ、朝は  
「そう?」  
「そうだよ。 まるで何時もと立場逆だよねえ」  
「んー……ん。 あれ、ブラどこやったっけ……」  
「あー……床に落ちてるよ。 ほら、そこ」  
「……何であんなところに?」

「それはわたしの台詞だよ」

「だよねえ……あ、ごめんっ、首元っ……」

「ん？ あー……いいよ、気にしなくて。 どうせ誰も気にしないだろうし」

「するでしょう？ 何してなくてもケーキちゃんは可愛らしいじゃない」

「あれ、もしかして心配してくれてる？」

「それと嫉妬も、かな？」

「それを言うならわたしだっていつもそんな風に思ってるよ？」

「私のことを？ なんで？」

「だって美人さんだし、モテそうだし」

「縁がないよ。 だから安全安心」

「少なくとも心配くらいはするよ？」

「なら、首輪でもつける？」

「……悪くないかもあって思っちゃうのって、もうどうしようもないかな？」

「いいんじゃないの？ 私だって首輪でつながたいもん」

「あ、こらっ。 どこ触ってるのっ」

「んー……どこでしょう？」

「言わせる気かっ」

「って言うか……こんなにノンビリしてて大丈夫？」

「……あっ」

・ラブラブ系百合について

「あわわわっ、ご飯急いで食べてっ、歯磨いてっ、お化粧品してスーツ着てっ」

「大変そうだねえ」

「呑気にコーヒー飲んでないで手伝ってようっ！」

「とは言えアラームの時間間違えてたのはケーキちゃんでしょう？」

それに私は未だ眠いんだよ?」

「……ねえ、アラーム弄ったでしょう?」

「……なんのことかなあ?」

「三十分もずれてたらそれくらい分かりますよっ!」

「……ふああ」

「欠伸で誤魔化さないっ!」

「……だって、その……ね?」

「ぐっ……可愛らしく小首を傾げおってえっ……そんな所作で騙されたりなんか　しちゃうよこんちきしょーっ!」

「ほらほら、バカやってないで急がないと」

「はぐむぐんぐっ!　くひょーっ、急いでもちヨコさんの「飯おいひいっ!」」

「どういたしまして?」

「むぐむぐっ……」

「……すっかり慣れた景色になったよねえ」

「むぐっ……はむ?　何が?」

「一緒に居るのが」

「むぐむぐっ……まあ、なんだかんだでほぼ毎週お泊りだし……恋人関係になつて二か月かあ、早いねえ」

「とは言え……日、月と連日お泊りして、こうして月曜日の朝に御見送り……なんだか奥さんになつた気分かな?」

「子供は何人欲しい?」

「一人いればいいよ。あとはケーキちゃんがずっと傍に居ればね?」

「……平然と可愛い事言つてくれるねえ」

「名前は?」

「考えとく」

「ふふっ。夢があるね」

「夢は叶えるものか見るものか……って朝っぱらから哲学してる場合じゃないのっ。　齒磨かなきゃっ」

「忙しいねえー……」

「誰のせいだと思ってるのっ!」

「ごめんね?」

「……そう言いつつ背後から抱きしめないのっ」

「ほら、お口……磨いてあげるから」

「ふぐっ……何これ新しい二人羽織みたいっ! もごもごっ……」

「……だってね、ケーキちゃん。こうして一緒にになれるのっってお互いの仕事の都合もあるけど週二回くらいなんだよ? だったら少しでも長く居たいと思うじゃない?」

「だからって人を寝坊させようとしたり、あわよくば仕事休ませようとするんじゃないやせんっ……もくぼっっ」

「ちよっとした悪戯だっ。許して?」

「むうー……まあ、確かにわたしだってもっといっぱい一緒にいたいとは思っけどさ? でも……お仕事はやっぱり重要だからね?」

「養ってあげるって何度も言ってるじゃない」

「……まさかチヨコさんがお嬢様だったとは思ひもしなかったよね。何このマンション。最上階から見える都市の景観美しいねっ」

「はあ……もっとなめてくれてもいいのに」

「墮落と怠惰は憎き敵ですよ、チヨコさん? がらがらっ……ぷえっ」

「んー……ん、こっちむいて?」

「んぐんぐっ……はふうっ……はっ、次はメイクをしなきゃ」

「はい、それじゃあこっち向いて? うん、洗顔も済ませてるし……今日もばしっときめないかね?」

「て、適当でいいのにいっ!」

「ダメだよ。私のケーキちゃんだよ? 可愛くするに決まってるじゃない」

「あんまり時間ないんだってばーっ」

「いいじゃない、あの車でかっ飛ばせば。速いんでしょっ、R3」

5?」

「この時間帯は大渋滞なのっ。　　ううっ……今日は電車でいっこうかなあ……」

「私の911貸そうか?」

「GTR?　だめだめっ、高価すぎてこわいからっ。　それに結局渋滞なのは変わらないからっ」

「むう……ん、よしっ、軽い感じだけど上出来っ」

「もうっ、そんなに凝らなくなったっていいのにな……」

「うーん……何処から見ても可愛いねっ」

「褒めても何もでないってばっ。　よしっ、何とかこの時間ならギリギリいけそうっ……」

「鍵、どっち?」

「そっちっ。　GTRっ」

「はい、どうぞ」

「えーと、お財布もある、書類もある、他仕事道具は全部車の中っ。それじゃあ行ってきますっ!」

「……忘れ物あるんじゃない?」

「ふえ?　なにになっ?」

「……鈍いね?」

「……と見せかけておいて　んっ」

「んっ……ずるいんだ、ケーキちゃん。　分かっててやったの?」

「さあてどうでしょう?　わたしも大人なやり取りくらい出来なきゃねー?」

「はあ……これでまた一週間お預けかあ……」

「今日はお店お休みかあ。　明日また行くから、だから我慢して?　ね?」

「ううーっ……」

「まさかチヨコさんがこうもラブラブな本性隠し持ってただなんてなあー……」

「いや……?」

「まさかつ。寧ろ……大好きだよ？」  
「ん……私も大好き」  
「へへっ……んっ、やる気も十分っ！ それじゃあ行ってきますっ」  
「んっ。気を付けてね？」  
「チヨコさんもゆっくり休んでね？ まだお疲れでしょ？」  
「それはお互い様でしょ？」  
「ふへへえっ、そうでしたっ」  
「……行ってらっしゃい、ケーキちゃん」  
「んっ。行ってきますっ、チヨコさんっ！」

こうして一日が始まっていく。

「……あーああ。次は一時間後に弄つところ……」  
「ふいっ。次は別のアラーム用意しとこっ」

終わり

## あとがき

読了、お疲れ様です。作者のつゆたくで御座います。

ふとした思い付きで始めた百合のほそみちでしたが、こんな感じで完結と言った運びで御座います。

グダグダと続けるよりかはさぱっと終わらせるのが一番かと思われます。

この作品を読んで何かしら思う事だとかがあれば幸いで御座います。

百合の普及を祈りつつ、それではまた次回作にて。

と、思ったらやはり文字数が足りないとの事なので次回作と言うか他の百合作品についてを書こうと思います。

現行では「アリス嬢と寡言なシャロ」を週一程度で更新しています。

よろしかったらばそちらの方も見て頂けたらばと思います。

それではこの程度で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6251cs/>

---

百合のほそみち

2016年1月6日03時32分発行